鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(6)

県道高山一吾平線道路整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

東田遺跡

1993年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序　　文

この報告書は、県道高山－吾平線整備事業に先だって、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した東田遺跡の緊急発掘調査の記録です。

東田遺跡は、大隅半島のほぼ中央南東部、高山町の志布志湾に面した沖積平野の水田内にある弥生時代と古墳時代を中心とした遺跡で、広範囲に及ぶ遺跡であることが知られています。

今回の調査では、東九州や畿内・瀬戸内地方との交流を考えさせる資料もあり、そのほかにも多大な資料を提供してくれました。

本報告が、南九州歴史解明の一助となるとともに、地域の古代史研究および文化財保護のために活用されることを願ってやみません。

終わりに、この発掘調査に御協力をいただいた鹿屋土木事務所や関係者および地元の皆様に心から感謝いたします。

平成５年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

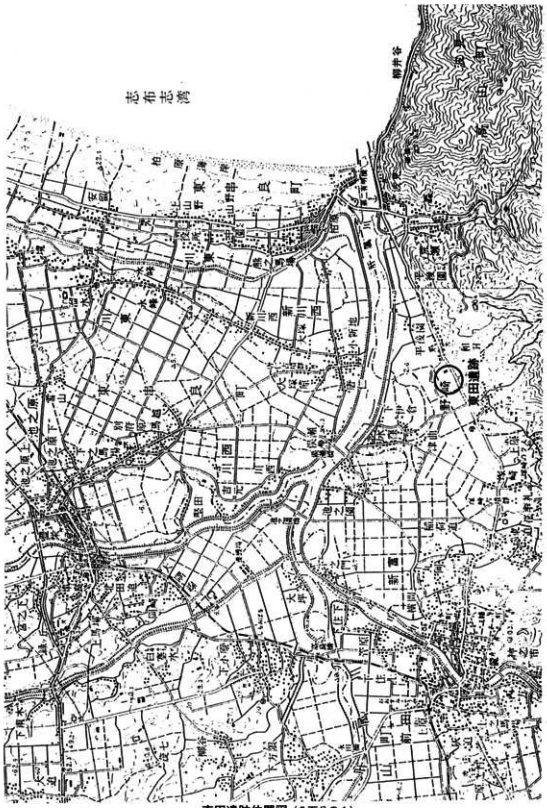
所長　大久保　忠昭

報 告 書 抄 録

フ リ ガ ナ	ヒガシダイセキ
書　　名	東田遺跡
副 書 名	県道高山～吾平線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	6
編 著 者 名	立神次郎　大久保浩二
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　在　地	〒899－56　鹿児島県姶良郡姶良町平松6252
発 行 年 月 日	1993年3月31日

フ リ ガ ナ	ヒガシダイセキ
所 収 遺 跡	東田遺跡
フ リ ガ ナ	カゴシマケンキモツキグンコウヤマチョウノサキヒガシダ
所　在　地	鹿児島県肝属郡高山町野崎東田
調 査 期 間	1992　0713 ～ 0904
調 査 面 積	1610㎡
調 査 原 因	県道改良工事

	主な時代	主 な 遺 構	主な時代	主 な 遺 物	出土量	特 記
出土遺物・遺構等	不明	溝状遺構	縄文時代	晩期の土器 縄線紋文土器　組目突帯文土器 石器（石斧、磨石など）	パンケース 約２箱 約２箱	
			弥生時代	中期末～後期の土器 甕形土器、壺形土器、鉢形土器 蓋形土器、高坏形土器、器台	パンケース 約30箱	
			古墳時代	甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、ミニチュア土器	パンケース 約20箱	
			平安時代	土師器、須恵器、陶磁器	パンケース 約１箱	



東田遺跡位置図（5万分の1）

例　言

1　本報告書は、平成4年度に実施した県道高山－吾平線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、鹿児島県土木部の依頼を受けて、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査については、高山町教育委員会や鹿屋土木事務所工務三課の協力を得た。

4　発掘調査や発掘調査報告書作成については、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳（考古学）先生にご指導をお願いし、有益な教示と助言を受けた。

5　この報告書は、上記の方々の助言と協力を得て鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施し、執筆は、立神次郎・大久保浩二が担当した。

6　遺物の実測、トレース、写真撮影、編集については、立神次郎・大久保浩二が行い、遺物の整理・復元作業等は、鹿児島県立埋蔵文化財センターの整理作業員が行った。

7　本書で用いたレベル数値は、海抜絶対高で、挿図中の遺物番号は図版中の番号と一致する。

8　本書で用いた地図は、鹿児島県所有と高山町所有のものを使用した。

9　出土遺物の管理・保管は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで一括して取り扱っている。

10　東田遺跡出土土器に付着した赤色顔料についての日本電子製走査型電子顕微鏡による分析結果を図版の後に所収した。

本 文 目 次

序　文
報告書抄録
例　言
目　次
第Ⅰ章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至までの経過 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
　第３節　調査の経過 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境 …… 4
第Ⅲ章　発掘調査 …… 8
　第１節　調査の概要 …… 8
　第２節　層　序 …… 8
第Ⅳ章　遺構 …… 13
第Ⅴ章　遺物 …… 14
　第１節　縄文時代の遺物 …… 14
　第２節　弥生時代の遺物 …… 23
　第３節　古墳時代の遺物 …… 35
　第４節　中世の遺物 …… 48
第Ⅵ章　まとめ …… 53

挿 図 目 次

第１図　東田遺跡位置図
第２図　周辺の遺跡 …… 5
第３図　東田遺跡の地形図 …… 6
第４図　グリッド配置図 …… 7
第５図　土層断面図 …… 9～12
第６図　溝状遺構平面図・土層断面図 …… 13
第７図　出土土器実測図（1） …… 15
第８図　出土土器実測図（2） …… 16
第９図　出土土器実測図（3） …… 17
第10図　出土石器実測図（1） …… 18
第11図　出土石器実測図（2） …… 19
第12図　出土石器実測図（3） …… 20

第13図　出土石器実測図 (4) …… 21
第14図　出土石・鉄器実測図 (1) …… 22
第15図　出土土器実測図 (4) …… 24
第16図　出土土器実測図 (5) …… 25
第17図　出土土器実測図 (6) …… 26
第18図　出土土器実測図 (7) …… 27
第19図　出土土器実測図 (8) …… 29
第20図　出土土器実測図 (9) …… 30
第21図　出土土器実測図 (10) …… 31
第22図　出土土器実測図 (11) …… 32
第23図　出土土器実測図 (12) …… 33
第24図　出土土器実測図 (13) …… 34
第25図　出土土器実測図 (14) …… 35
第26図　出土土器実測図 (15) …… 36
第27図　出土土器実測図 (16) …… 37
第28図　出土土器実測図 (17) …… 38
第29図　出土土器実測図 (18) …… 39
第30図　出土土器実測図 (19) …… 40
第31図　出土土器実測図 (20) …… 41
第32図　出土土器実測図 (21) …… 42
第33図　出土土器実測図 (22) …… 43
第34図　出土土器実測図 (23) …… 44
第35図　出土土器実測図 (24) …… 45
第36図　出土土器実測図 (25) …… 46

表 目 次

第 1 表　周辺遺跡一覧表 …… 5
第 2 表　出土土器観察表 …… 49
第 3 表　出土土器観察表 …… 50
第 4 表　出土土器観察表 …… 51
第 5 表　出土石器観察表 …… 52

図版目次

図版 1　発掘風景・土層断面 …… 55
図版 2　遺構検出状況・遺物出土状況・出土遺物 (1) …… 56
図版 3　出土遺物 (2) …… 57
図版 4　出土遺物 (3) …… 58
図版 5　出土遺物 (4) …… 59
図版 6　出土遺物 (5) …… 60
図版 7　出土遺物 (6) …… 61
図版 8　出土遺物 (7) …… 62

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至までの経過

鹿児島県教育委員会は、埋蔵文化財包蔵地の保護を図るため必要に応じて分布調査を各地区ごと及び諸開発ごとに実施し、多くの遺跡が発見されている。

鹿児島県教育委員会は、文化財保護・活用を図るために諸開発関係機関と、事業着手前に文化財の有無等について協議し開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県農政部（鹿屋耕地事務所）は、高山町内の野崎地区にほ場整備事業の計画にあたり、事業計画区域内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（以下、県文化課）に照会した。県文化課はこれを受け、平成元年に県文化課、高山町教育委員会社会教育課（以下、町社会教育課）、同町耕地課、鹿児島県農政部（鹿屋耕地事務所）と当該地区の埋蔵文化財の分布調査を合同で実施した。

その結果、同事業計画区域内において遺物の散布を確認した。そこで、遺跡の取り扱いについて、県文化課、町社会教育課、町耕地課、鹿児島県農政部（鹿屋耕地事務所）の四者で協議した結果、同事業の着手前に遺跡確認調査を実施する運びとなった。確認調査は、平成2年12月3日から12月25日までの実働15日間において実施し、各地点に遺物包含層が判明した。

確認調査の結果、遺物包含層が確認された地点内を縦走する県道高山－吾平線について整備事業が鹿児島県土木部（鹿屋土木事務所）で平成4年度に計画された。

そこで、その取り扱いについて関係機関と協議した結果、今回、県立埋蔵文化財センターで発掘調査と一部確認調査を実施する運びとなった。

第2節　調査の組織

調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	大久保　忠昭
調査企画者	〃	次長兼総務課長	水口　俊雄
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎　勝洋
調査担当者	〃	文化財主事	立神　次郎
	〃	文化財研究員	大久保　浩二
調査事務担当者	〃	主査	下園　勝一
	〃	主事	中村　和代
調査指導者	鹿児島県文化財保護審議会委員		河口　貞徳

第3節　調査の経過

東田遺跡は、平成2年度の確認調査の結果、各地点で遺物包含層を確認した。

平成4年度は、同事業区域内に県道高山－吾平線整備事業が県土木部で計画されたために、記録保存のための調査を平成4年7月13日から平成4年9月4日まで実施した。

調査は、緊急発掘調査と一部確認調査が対象で、両調査を併行して実施した。特に、緊急発掘調査区は、全面の通行止などの処置ができず、現道隣接地の水田内に迂回路を設定し、片側通行による現道敷内の調査であった。さらに、調査対象地が現道敷の全長が百数十mに及んだために、便宜的に二調査区に分けて調査を実施した。

本遺跡は、肝属平野内の沖積平野内の微高地の県道敷内に位置しているために、現道敷の隣接地は広大な水田地帯となっている。調査開始の当初は、黄金の稲が実った状態であり、アスファルトの除去やその処理、客土などの排土処理が問題となったが、距離はかなりある排土捨て場までダンプカーで運搬する処置をとった。

調査の状況は、下位層につれ湧水が著しく、泥水となりぬかるんだ状態であり、縄文時代、弥生時代、古墳時代、中世の各時代の遺物が混在しての出土状況であった。また、層の堆積状況も沖積平野特有の層堆積を呈しているために、激しい湧水とも重なって層位的な把握ができない状況であった。

本遺跡の出土遺物の大半は、A－5区、A－7・8区の調査区域を北側方向へ走る凹地状の窪みから各時期の遺物が混在して出土した。

以下、調査の経過については、各一週毎の日誌抄をもってかえる。

7月13日～7月17日

13日より調査を開始する。確認調査実施地点については、ブロック塀をバックフォーで除去し、その後3つのトレンチを設定し掘り下げる。その結果、ともに地山となる。緊急発掘調査区についてグリッド設定作業を実施。現道が生きているため道路拡張部のA－1～5区について掘り下げる。客土、表土及び水田の旧表土はバックフォーで除去する。各区とも湧水のために冠水する。水中ポンプにより排水作業を実施しながら掘り下げる。土器小破片が大量に出土する。

7月20日～7月27日

A－1～5区については、各区ともに湧水が激しいために冠水が早く、水中ポンプにより排水作業を実施しながら掘り下げる。紫ゴラがブロック状に観察され、土師器、青磁、成川様式土器破片などが出土し、下位へ下がるほど量が多くなる。遺物出土状況平板実測・レベル実測作業。遺物取り上げ作業。A－1～5区の現道敷の除去のために、A－6～16区について下層の状況を把握するためトレンチにより確認を実施する。迂回路設置作業。

7月27日～7月31日

A－1～5区については、バックフォーと大型ダンプにより現道敷のアスファルト及び客

土搬出作業。ベルトコンベアーにより残土除去作業。土層断面実測（上位層について）実施。各区ともに湧水が激しいために冠水が早く、水中ポンプにより排水作業を実施しながら掘り下げる。下位に下がるほど半完形品が多く出土する（山ノ口式土器、成川様式土器、椿描文土器）など。A－6～16区についてはトレンチを一部拡張して下位層について掘り下げる。

8月10日～8月12日

A－1～5区については、台風などの影響で排水作業を実施する。山ノ口式土器、成川様式土器などの甕形土器、壺形土器、高坏形土器などの口縁部、頸部、胴部、底部、手捏土器、安国寺式系土器や磨製石斧が混在して出土する。A－6～16区について迂回設置作業を実施する。

8月17日から8月20日

A－1～5区については、各区ともに排水作業を実施し、最下層を掘り下げる。量は少なく、山ノ口式土器や成川様式土器が混在して出土する。土層断面実測作業。A－1～16区については、現道敷の排土処理作業。台風対策を実施する。各区ともに雨水や湧水が激しいため冠水し、水中ポンプにより排水作業を実施しながら掘り下げる。A－6～8区については湧水のために水中ポンプにより排水作業を実施しながら掘り下げる。山ノ口式土器、成川様式土器などの甕形土器、壺形土器、高坏形土器、刻目突帯文土器などが混在して出土する。17日より川崎研修生調査に参加。

8月24日～8月28日

A－3～14区については、湧水のために水中ポンプにより排水作業を実施しながら掘り下げ作業を実施する。A－5区とA－7・8区は凹地状を呈し、凹地状の部位より破片の大きい土器が出土する（山ノ口式土器、成川様式土器、刻目突帯文土器などがなが混在して出土する）。A－9・10区は、流水作用のためか砂層が階段状に確認され、小川の跡が漸移的に移行していった状況が観察できた。しかし、激しい湧水のために泥水状況での調査である。成川様式土器を中心に山ノ口土器の甕形土器、壺形土器の破片や刻目突帯文土器などの破片が出土する。A－11～16区は、排土搬出作業。各区土層断面実測作業。A－13区に堀り込み部より下方で溝状遺構を検出し、掘り下げる。

9月1日～9月4日

A－11～16区については、湧水のために水中ポンプにより排水作業を実施しながら掘り下げ作業を実施する。A－12区より成川様式土器や山ノ口土器とともに瀬戸内系土器が出土する。A－13区で検出した溝状遺構は、冠水のため再度精査作業を実施し、写真撮影、平・断面実測作業を行う。各区土層断面実測作業。2・3日、河口貞徳先生指導。

その間、高山町教育委員会、田村産業（田村氏・谷本氏・迫氏）、鹿児島大学本田氏、琉球大学池田氏、鹿児島大学・琉球大学学生、鹿屋土木事務所の方々が来跡。

第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境

東田遺跡は、大隅半島のほぼ中央東南部に位置し、北側は大隅半島最大の肝属川を境とし、東串良町・串良町と境をなし、西側は肝属の沃野を隔てて吾平町・鹿屋市と連なり、南側は甫与志岳(968m)を中心とした国見山系の山々となり内之浦町・大根占町と相接し、東側は石油備蓄基地のある志布志湾に面している。

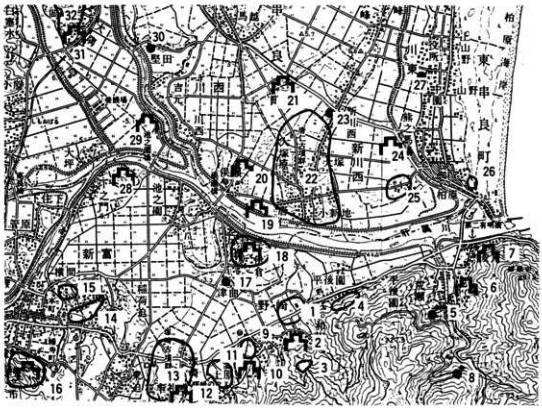
高山町の地形は、概して南に高く、北にいくにつれ次第に低くなり、最南の花崗岩より成る1000mに近い肝属山地から、中生層の砂岩、頁岩となる300m内外の低い山地となり、次第に20～60mのシラス台地で、さらに、数mの低い沖積平野を呈する地勢となっている。

本遺跡は、東串良町との境界付近で和田集落に隣接した県道敷を含む水田内に位置している。北側は肝属川が東流し、これらの河川は、現在では河川改修がすすみ、複雑に入り込んだ旧河川跡が行政区画区域となり、かなり蛇行し過去においては氾濫が多かったという。

この肝属川は、高隈山地の御岳に源を発し、姶良川・高山川・串良川の支流とが合流し志布志湾へ蛇行しながら流入している。河川流域は肥沃で広大な肝属平野が形成され、水田地帯となっている。さらに、北側を概観すれば、志布志湾沿岸には新旧の砂丘が北東方向へ延び、この砂丘と並行して永吉台地が続き、串良川を挟んで広大な笠野原台地へと続いている。南側は肝属山地へ続く台地や丘陵が迫った地勢となり、西側は水田を経て高山町の市街地などが所在する新富台地へと続いている。

本遺跡は、このような環境に位置しているために、周辺には遺跡地も多い。そこで、高山町管内の遺跡について概観してみれば、これまで旧石器時代の遺跡は確認されていないが、縄文時代になると、早期の遺跡として岩屋遺跡、鐘付遺跡などがある。後期の遺跡としては、本遺跡に近隣している和田城跡、そして、瀬戸宇治遺跡、山下の上遺跡、片野遺跡、道中原遺跡、折生野遺跡などが知られ、指宿式土器や市来式土器が出土している。晩期の遺跡としては、和田城跡、床滑遺跡、乙子神社境内遺跡などがあげられる。弥生時代は、肝属川を含めた河川流域にひろがる沖積平野や、その周縁にあたる台地縁辺部に、本時代の遺跡の存在の可能性が強い地域で、昭和24年に東大駒井和愛博士、八幡一郎氏が住居跡を検出した花牟礼遺跡、住居跡が確認された上原遺跡（昭和52・昭和63調査）、山ノ口式土器や瀬戸内・畿内系の櫛描文（櫛目文）土器が出土した塚崎遺跡などがあり、瀬戸内・畿内との交流があったことが知られる。

古墳時代には古墳も多く、高塚古墳として、国指定史跡の塚崎古墳群（43基）をはじめ、丸岡古墳群、辺塚古墳群、西横間古墳群などが知られ、一方、南九州独自の地下式横穴も存在し、塚崎地下式横穴群、横間地下式横穴群、上ノ原地下式横穴群が発見され、軽石製組合石棺や須恵器、土師器、蕨手刀、鉇行剣、刀子、イモ貝製腕輪など副葬品も出土している。一方、花牟礼（大戸原）遺跡（昭和55調査）では、成川様式土器に伴う住居跡が検出されている。奈良・平安時代には、西大園遺跡で土師器と内黒土師器が出土し、中世においては、和田城、高山城、検見崎城、富士城などの山城が築かれている。

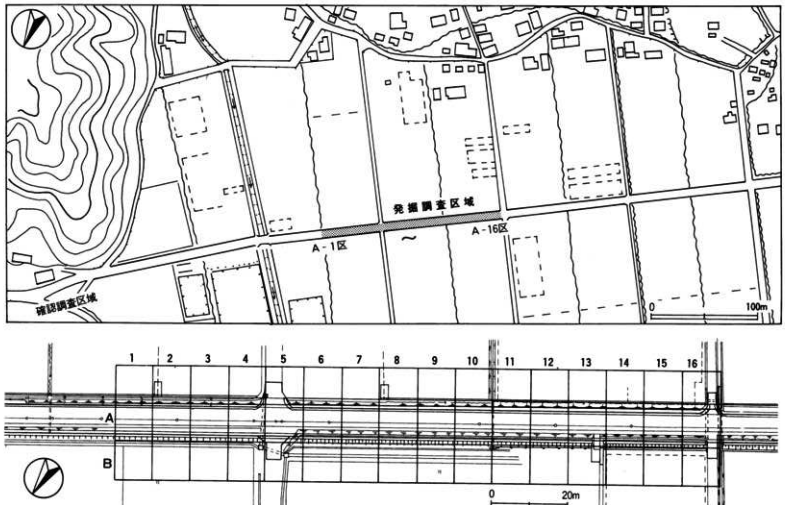


第2図　周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	地形	時期	遺物等	備考
1	東田	高山町野崎東田	沖積地	縄文～中世	弥生～古墳が中心	本報告
2	和田城跡	〃 野崎字和田	〃	建武2年～永禄9年	鎌倉武士屋ノ一丸、二の丸、馬場、堀跡等現在	
3	横溝	〃 野崎和田横溝	山麓	弥生中期	弥生土器・打製石斧	
4	平後園	〃 〃 平後園	山腹	弥生	須恵器・磨製・打製石斧	
5	西山ノ上	高山町波見西山ノ上	山腹	奈良	須恵器（風字硯）	高山町歴民館に展示
6	波見城跡	〃 〃 字轟	〃	弘安の頃～永禄9年代		
7	波見の陣跡	〃 波見字牟札	山麓	弘安の頃～永禄年間		
8	長谷	〃 〃 荒瀬長谷	〃	古墳	土師	
9	西大園	〃 〃 西大園	台地末端	弥生	弥生土器	
10	天道山塁跡	〃 〃 天道山	丘陵	戦国中期～天正2年		
11	上原	〃 〃 上原	〃	弥生中期	弥生土器・磨製石斧	S33住居跡発見
12	塚崎城跡	〃 野崎字塚崎	平地	南北朝～永禄年間		
13	塚崎古墳群	高山町野崎塚崎	台地末端	古墳	土師器	
14	丸岡古墳群	〃 〃 米山寺墓地	〃	古墳	古墳群	
15	横間土址	〃 〃 横間	〃	弥生・古墳		今日の「東」の「山」の書き、横間、横間、丸岡の書きさ
16	弓張城跡	〃 新宮字城山他	丘陵	正平5年～永禄9年		（別）麓ノ城
17	津曲	〃 〃 津曲	沖積地	弥生	弥生大型壺	
18	下伊倉城跡	東串良町新川西下伊倉	微高地	弥生・中世		
19	別府ヶ城跡	〃 小字別府ヶ城	〃			
20	堀込城跡	〃 〃 字崩尾	〃			
21	笹塚城跡	〃 〃 字笹塚	〃			
22	唐仁古墳群	〃 川西	〃	古墳		
23	新川西	〃 新川西麦塚	沖積地	弥生	弥生土器	
24	曲之城跡	東串良町新川西字曲之城	平地			
25	古市	〃		弥生・古墳	土師、奈良平安	
26	三十石	〃 〃 三十石		弥生・古墳	成川式土器	
27	役所	〃 〃 役所	〃	〃 中期	甕形・高杯等	
28	肝付氏古城跡	〃 下小原字園田	〃	戦国時代～永禄9年		（別）城ノ園
29	肝付氏古城跡	串良町岡崎字西ノ丸	〃	平安末期～		（別）西ノ丸居館
30	堅田	串良町上小原岡崎堅田	〃	弥生	成川式	
31	北田ノ上古墳	〃 〃 北田ノ上	〃	古墳		
32	岡崎古墳群	〃 有里岡崎	台地末端	古墳		

第1表　周辺遺跡一覧表

第3図　東田遺跡の地形図


発掘調査区域
A-1区
～
A-16区
確認調査区域
0
100m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
A
B
0
20m

第4図　グリッド配置図

第Ⅲ章　発掘調査

第１節　調査の概要

本遺跡の発掘調査は、本年度、県道高山－吾平線整備事業が県土木部で計画されたために、平成２年度の確認調査に基づき、整備計画路線内の２地点において実施した。

１地点の調査地は、波野小学校側の墓地付近のカーブにあたる地点が整備事業区間で、丘陵地と微高地との接点部分の狭小な宅地と県道とに挟まれた細長い僅かな範囲である。確認調査は、その対象に、１×２ｍのトレンチを３ヶ所設定して実施した。調査の結果、ともに表土以下が地山である粘土と礫との混土層であったため確認調査のみで終了した。

２地点の調査地は、第１章第３節調査の経過で触れたとおりの環境であった。当初、両隣接地ともに、稲は黄金のみのりの時期であり、迂回路の設定が不可能であった。また、調査対象地が百六十㎡に及ぶ現道敷地内の水田内にあった。調査は、住民生活と交通量とを念頭に置き、収穫の終了とともに便宜的な迂回路の設定と調査区の分割により実施した。

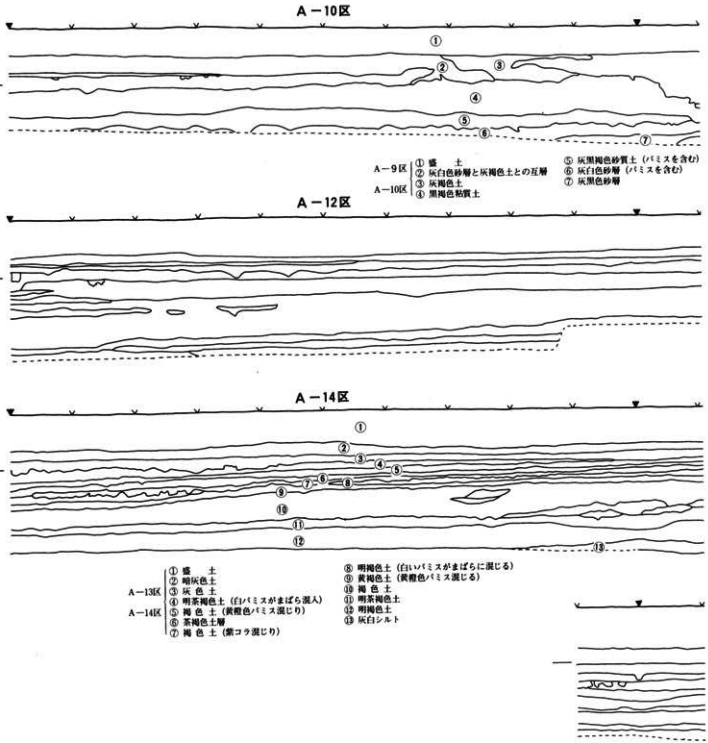
当初、アスファルトの取り壊しや客土の処分後、グリッドを設定し、旧耕作土よりやや下部付近から掘り下げ作業をすすめた。その結果、下位層につれ湧水が著しく、沖積平野特有の層堆積で泥水とぬかるみとが重なり、層位的な把握はできなかった。出土遺物は、上位から中位にかけての層には土器小破片が多く、下位につれ各時期の遺物が混在して、かなり大きい破片が多量に出土した。

本遺跡の検出遺構は、Ａ－13区より溝状遺構が検出されたのみであった。一方、出土遺物の大半は、Ａ－５・７・８区において、調査区域を北方向へ走る凹地状の窪みから刻目突帯文土器の時期から中世の時期の遺物が混在して出土した。これらの土器には、在地の山ノ口式土器や成川様式土器とともに、凹線文土器や櫛描文土器、安国寺式土器などがあり、東九州や瀬戸内地方との交流があったことが知られる。

第２節　層序

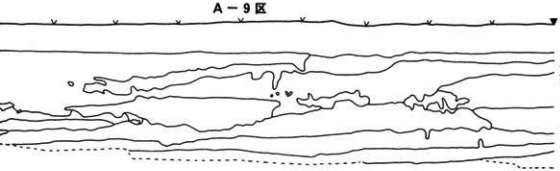
層序は、第１節調査の概要でも触れたように沖積平野特有の層堆積を示し、基本的な層序をここで記載し、各区で堆積や色調を異にしている。そこで、各区の堆積状況は、第５図土層断面図に示したが、各区内でも微妙な堆積を呈している。

Ⅰ層　明灰褐色土。ほ場整備による客土。
Ⅱ層　明褐色土。旧水田の耕作土。
Ⅲ層　褐色土。黒色を帯び、下部に砂粒を含む。
Ⅳ層　黄褐色土。砂粒を多く含む。
Ⅴ層　暗黄褐色土。
Ⅵ層　淡黒褐色砂層。砂粒を多く含む。
Ⅶ層　明黄褐色砂層。白色パミスを多く含み、砂粒は粒が大きい。
Ⅷ層　淡黒色砂層。花崗岩の粒子を含み、砂粒は粒が大きい。
Ⅸ層　黄白色砂層。白色パミスと金雲母を含む。砂粒は粒が大きい。

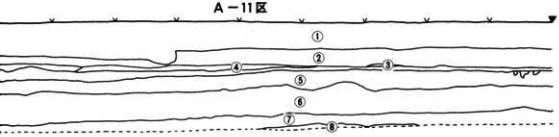


第５図　土層断面図（その１）

A－9区

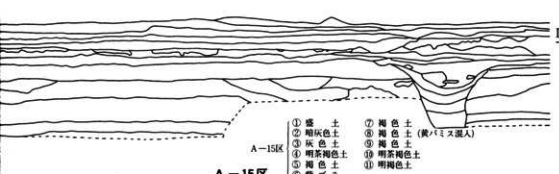


A－11区



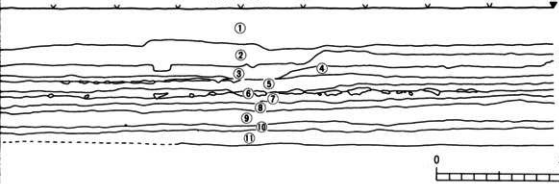
A－11区
A－12区
① 盛　土
② 灰褐色土
③ 黄褐色砂質土
④ 暗褐色土
⑤ 明黄褐色土
⑥ 黒褐色粘質土
⑦ 灰黒褐色砂質土（パミス多含）
⑧ 灰白色砂層（パミス多含）

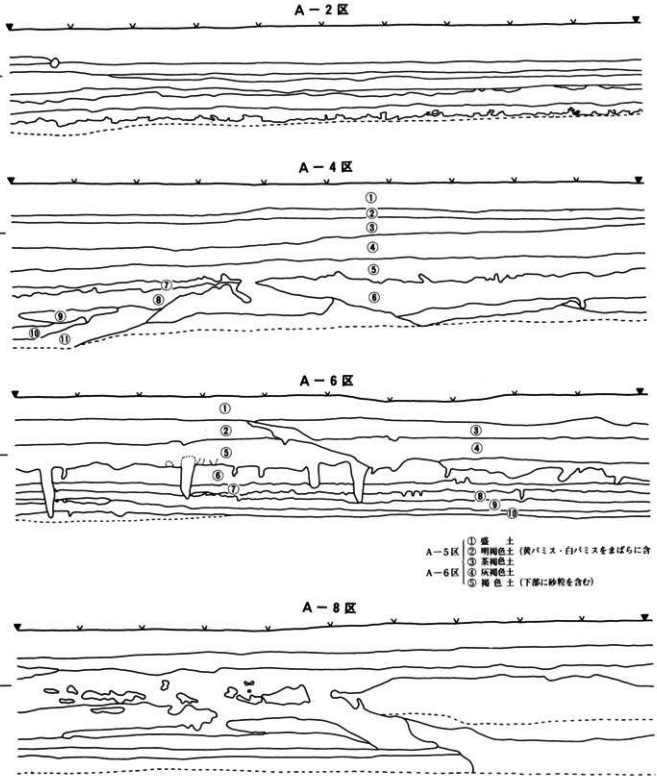
A－13区



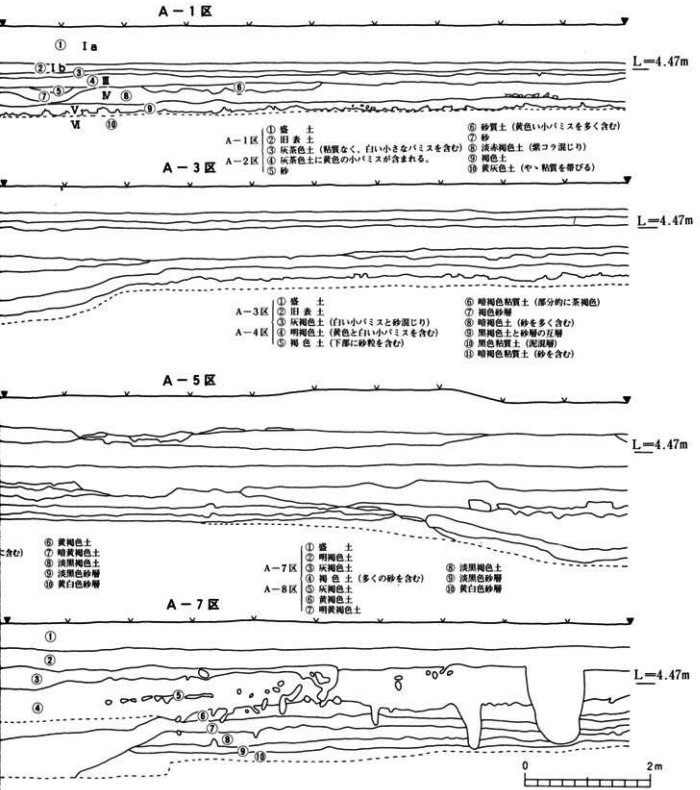
A－15区
① 盛　土
② 暗灰色土
③ 灰 色 土
④ 明茶褐色土
⑤ 褐 色 土
⑥ 紫 ゴ ラ
⑦ 褐 色 土
⑧ 褐 色 土（黄パミス混入）
⑨ 褐 色 土
⑩ 明茶褐色土
⑪ 明褐色土

A－15区



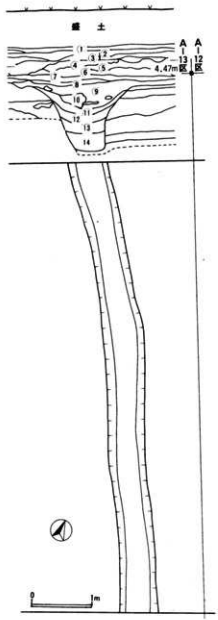


第5図　土層断面図（その2）


A－1区
L=4.47m
A－1区
① 盛　土
② 旧 表 土
③ 灰茶色土（粘質なく、白い小さなパミスを含む）
A－2区
④ 灰茶色土に黄色の小パミスが含まれる。
⑤ 砂
⑥ 砂質土（黄色い小パミスを多く含む）
⑦ 砂
⑧ 淡赤褐色土（紫コラ混じり）
⑨ 褐色土
⑩ 黄灰色土（やゝ粘質を帯びる）
A－3区
L=4.47m
A－3区
① 盛　土
② 旧 表 土
③ 灰褐色土（白い小パミスと砂混じり）
A－4区
④ 明褐色土（黄色と白い小パミスを含む）
⑤ 褐 色 土（下部に砂粒を含む）
⑥ 暗褐色粘質土（部分的に茶褐色）
⑦ 褐色砂層
⑧ 暗褐色土（砂を多く含む）
⑨ 黒褐色土と砂層の互層
⑩ 黒色粘質土（泥炭層）
⑪ 暗褐色粘質土（砂を含む）
A－5区
L=4.47m
⑥ 黄褐色土
⑦ 暗黄褐色土
⑧ 淡黒褐色土
⑨ 淡黒色砂層
⑩ 黄白色砂層
A－7区
A－8区
① 盛　土
② 明褐色土
③ 灰褐色土
④ 褐 色 土（多くの砂を含む）
⑤ 灰褐色土
⑥ 黄褐色土
⑦ 明黄褐色土
⑧ 淡黒褐色土
⑨ 淡黒色砂層
⑩ 黄白色砂層
A－7区
L=4.47m
0
2m

第Ⅳ章　遺　構

遺構



第6図　溝状遺構平面図・土層断面図

溝状遺構

A－13区から溝状の遺構が検出された。検出面での幅が約60cmで、発掘区をほぼ南北方向に横切るように伸びている。

激しい湧水のため土がぬかるみ、水田のような状態で、正常な遺構の検出作業が困難であった。そのため土層断面で掘込みのラインを確認してから、平面的なプランを精査し、結果的に検出面がかなり下がってしまった。

土層断面から復元すると、掘込み面の幅が約１ｍ60cmで、深さが約１ｍの逆台形状を呈している。埋土は砂層を含むレンズ状の堆積をしており、水成作用により埋まっていったものと考えられる。

埋土の状況は以下の通りである。
①暗灰色土層②灰色土層（含白パミス）
③褐色土層（含黄橙色パミス）④白砂層
⑤灰黒色砂層⑥紫コラを多く含む層
⑦黒褐色砂層（含黄橙色パミス多）
⑧黒褐色砂層（含黄橙色パミス少）
⑨黒褐色砂層（含白パミス）
⑩黒褐色砂層（含黄白色砂少）
⑪黒褐色砂層（含黄白色砂多）
⑫黒褐色砂層（含黄白色砂、粘質度）
⑬黒褐色粘質度層（一部に砂層）
⑭黒褐色粘質度（含乳白色シルト、鉄分）

埋土中からは土器２点と石器１点が出土した。土器は小片のため図化できなかった。石器は二次加工を施した剥片（84）である。いずれも時代を決定づけるものはなく、溝状遺構の時期も不明である。

第Ⅴ章　遺　物

第１節　縄文時代の遺物

１、土器（第７～９図）

ここで取り扱った資料には、刻目突帯文土器、組織痕土器などがあり、深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器などの器種がある。深鉢形土器には孔列土器が、鉢形土器には組織痕土器がある。このほか、出土時期が不明な資料についてもこの項で扱った。

これらの資料は、小破片の資料が多く全体的な器形を知り得るものはほとんどなく、傾きなどに疑問が残るものばかりである。

①、深鉢形土器（第７図、１～16、第８図、17～25）

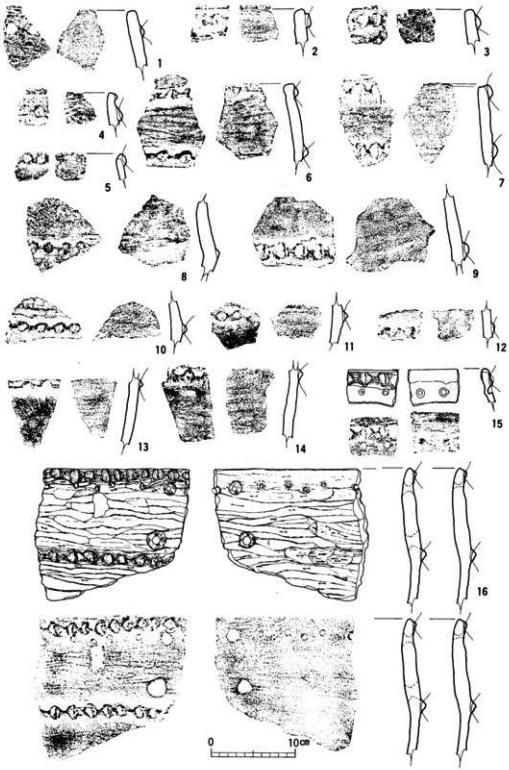
１～25は深鉢形土器が考えられる資料である。刻目突帯文の部位は、６・７・16・17・19・20が口縁部外側直下と肩部付近にあり、８～14・23～25が肩部付近に、その他の資料は口縁部外側直下にもつものである。口縁部に刻目突帯文をもつ資料で、１～４・18は口縁部外側直下よりやや下方にもち、５～７、15～17、20～22は口縁部外側にもつものである。その突帯は、断面が二等辺三角形状に粘土帯を貼り付けたもの、その後の指頭のような工具及びヘラ状工具による刻み目の布設時などに変形したものである。刻み目の方法は、１・４～６、10～14のように、指頭のような工具により大きく刻みを施したもの、８・23・24のように小さく施したもの、１・４～６、10～14のように、その中間的なものがある。そのほか、20～22はヘラ状工具によるものがある。２は指頭のような工具であるが、小破片で摩滅及び欠落しているため不明である。15～18は孔列土器で、15は口縁部破片で、刻目突帯直下に孔列があり、外側より穿孔しようとしたものであるが器内面まで貫通せず、その部位が盛り上がっている。円孔間は1.5㎝を測る。16・17は同一個体が考えられる口縁部破片で、刻目突帯直下に孔列があり、器壁内外面より穿孔したもので、その間隔は約1.1～2.1㎝を測る。さらに口縁部の刻目突帯直下と頸部の刻目突帯直下にそれぞれ補修孔をもち、前者は孔列の円孔を利用し、内外の器面より穿孔し、約0.8㎝を測る。後者は内外の器面より穿孔し、約1.5～1.1㎝を測る。17は口縁部の一部にリボン状突起をもち、破片のため不明であるが、一方に円孔を穿っている。

②、鉢形土器（第８図、27～30）

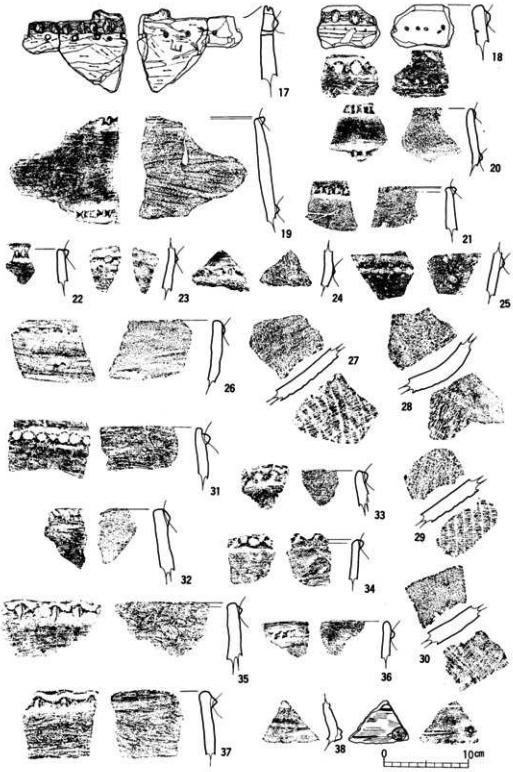
27～30は、鉢形土器で、蓆目圧痕の組織痕土器の資料で、その幅は約0.7～1.2㎝を測る。

③、浅鉢形土器（第８図、26・31～41）

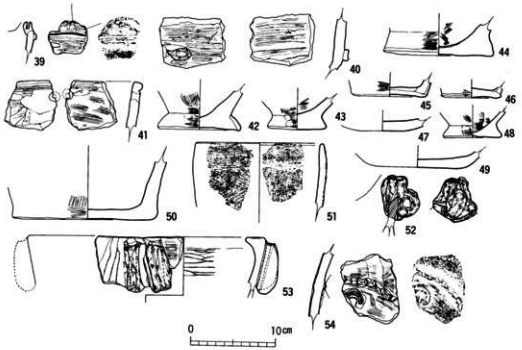
26・31～41は、浅鉢形土器で、26・31～37は粗製浅鉢形土器が考えられる資料である。ともに、口縁部外側直下に刻目突帯文をもつもので、32～34は口縁部外側直下に刻目帯文をもっている。その他は若干下位の部位にもつ資料である。36以外は大きく刻み目が施されている。



第7図　出土土器実測図（1）



第8図　出土土器実測図（2）



第９図　出土土器実測図（3）

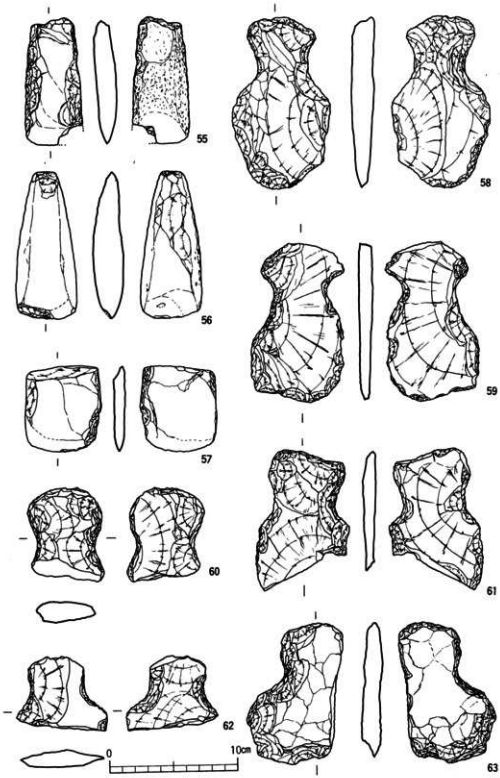
④、底部（第９図、42～50）

42～50は底部破片で口縁部資料との対応は困難である。42～44、48は外方へ大きく張り出すもので、42は上げ底、43・44・48は平底である。45・46・50は外方への張り出しのないもので、45・46は若干上げ底、50は平底を呈する木の葉底である。47・49は平底で外方立ち上がるものである。

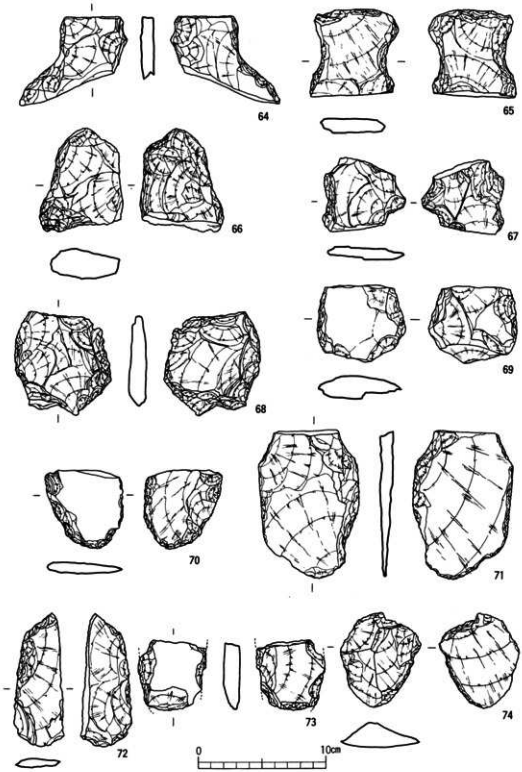
⑤、その他（第９図、51～54）

51は口縁径約9.3㎝を測り、器壁の薄い鉢形土器の口縁部破片で、小破片のため全体の文様構成は不明であるが、沈線による文様が施文されている。52は口縁部の突起が考えられる破片である。53は、口縁径約19.0㎝を測る鉢形土器で、二ケ所に円孔のある突起をもつ口縁部破片である。54は部位及び傾きは不明な器壁の薄い土器破片で、刻み目のある微粒突帯文で構成されている破片である。

ここにあげた資料は、時期等が不明なために一括して取り上げ図化に努めた。

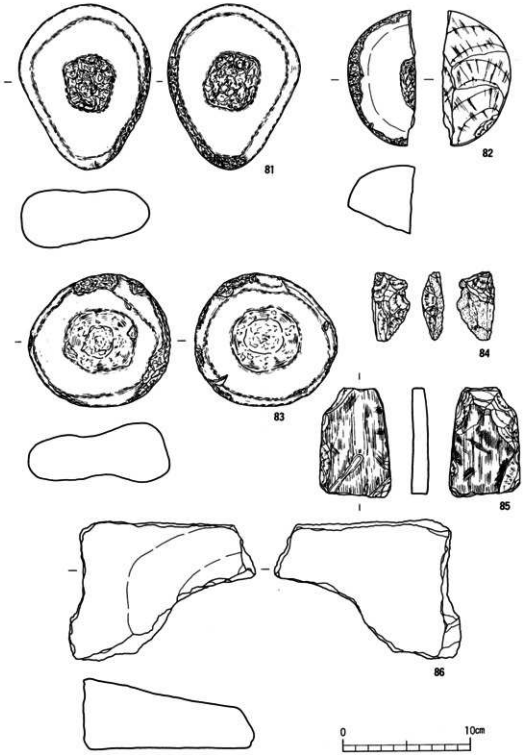


第10図　出土石器実測図（1）

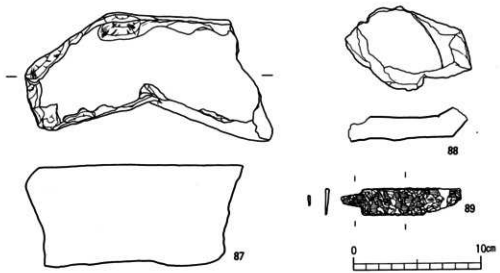


第11図　出土石器実測図（2）

第12図　出土石器実測図（3）



第13図　出土石器実測図（4）



第14図　出土石・鉄器実測図（1）

2、石器（第10～第14図、55～86）

石器には、磨製石斧、局部磨製石斧、打製石斧、磨石、砥石、敲石、凹石、石皿、石鍋などが出土している。この項ですべての石器を取り扱った。

56・57は磨製石斧で、55は局部磨製石斧である。55は刃部及び基部の一部が、57は基部が約分ほど欠損し、55～57は刃こぼれが観察できる。58～74は有肩石斧である。58・59はほぼ完形品である。61・63は刃部付近が、63は片側側縁部の肩部から刃部付近にかけて欠損している。60・62、63～67は有肩石斧の基部付近で、67～70、73・74は刃部付近の資料である。71は基部が、72は片側側縁部の肩部から刃付近にかけて欠損している。75・85はともに砥石の破損品で、四面ともに擦跡が観察される。76は棒状の敲石兼凹石の欠損品で、敲打による凹部は三面にある。77は磨石兼敲石で両面中央部付近と側縁部は帯状に敲打による痕跡が観察される。78～80、83は両面が大きく窪む凹石で、78は四面が窪む資料である。81・82は敲石で、81は側縁部の一部と両面の中央部が敲打により僅かに窪み、82は破損品である。84は表皮を残した残核で、86・87は石皿の破損品である。88は滑石製の石鍋の破損品である。

3、鉄器（第14図、89）

89は、A－3区より出土した刀子が考えられる資料で、現存全長は、9.4㎝、中茎は、1.6㎝を計り、刃部先端部が一部欠損している。刃部の中茎側約半分は錆のためか刃が潰れている。

第2節　弥生時代の遺物

1、土器（第15～第25図、90～299）

この項で取り扱う資料で、安国寺式系土器については、古墳時代初頭ぐらいまでに位置づけられるものもあり、この項で取り扱った。そこで、弥生時代の土器には、甕形土器、大型甕形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器、高坏形土器、器台形土器、坩形土器などが出土している。これらの土器は、破片のために傾きに疑問が残る。うち、弥生時代終末から古墳時代初頭に位置づけられる底部破片については、器種間の資料との対応が困難なために別項で扱うこととした。

甕形土器（第15～第17図、90～147）

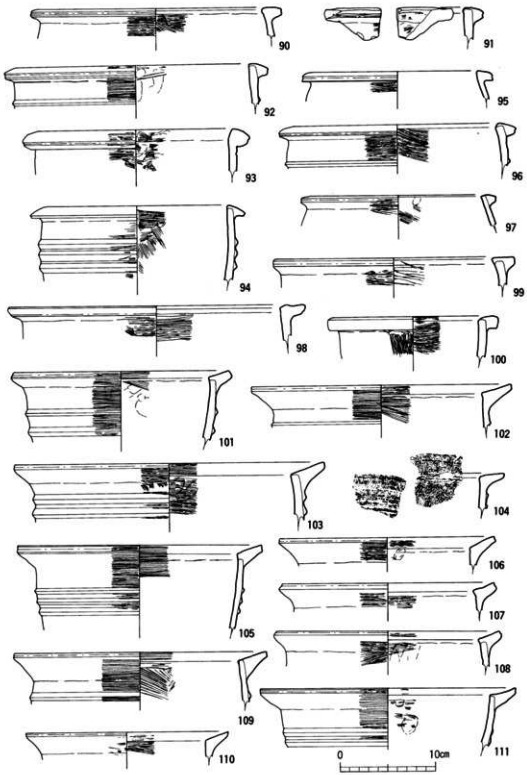
90～147は甕形土器に分類される。うち、129～147は底部破片である。甕形土器には、口縁部の形状が直口するもの、内湾するもの、外傾するものなどがあり、口縁部が逆L字状で、口縁部が若干下方へ下がるもの、逆L状に外反するもの、くの字状に外反するものや二叉状を呈するものなどがある。口縁端面は窪んで凹線状を呈するもの、丸味を帯びているもの、口縁部内側は、張り出しを作るもの、稜を作り出すものなどがある。胴部までの破片は少ないが、丸味を帯びているもの、張りのないものとがある。突帯の有無については、断面三角形貼付突帯をもつもの、もたないもの、断面M字状貼付突帯をもつものなどがある。底部は充実した脚台で、裾が長いものや短いもの、鋭角的に広がるもの、広がりのないものなどがある。裾の端面は窪んで、凹線状を呈するもの、丸味を帯びるものがみられる。脚台は高いものや低いものが認められ、底面は平底のもの、若干窪むもの、大きく窪むものなどがある。147は断面三角形貼付突帯をもつもので、他の器種が考えられる。

大型甕形土器（第17・第18図、148～166）

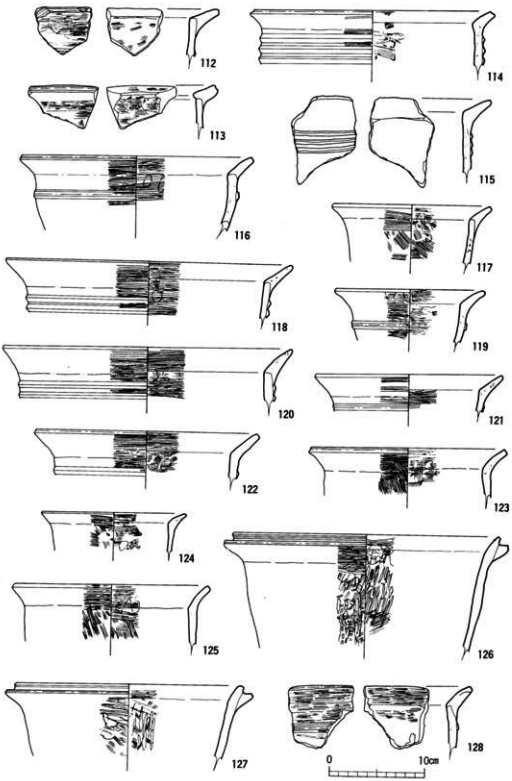
148～166は大型甕形土器に分類される。うち、148～157は底部破片である。これらの土器には、口縁部の形状が直口するもの、内湾するもの、内傾するものがあり、口縁部が逆L字状に外反のもの、くの字状に外反するものなどがある。口縁端面は窪んで凹線状を呈するもの、丸味を帯びているもの、口縁部内側には、張り出しを作るもの、稜を作り出すもの、稜をもたないものとがある。口縁部上面に刻目を施しているもの（160）がある。底部は、平底で厚さや底面径の差異は認められるが、底部より外方大きく開きながら立ち上がる器形を呈するもの、外方へ開きながら立ち上がるものとがある。壺形土器の底部との共通性をもっているために対応が困難である。

壺形土器（第19～第21図、167～219）

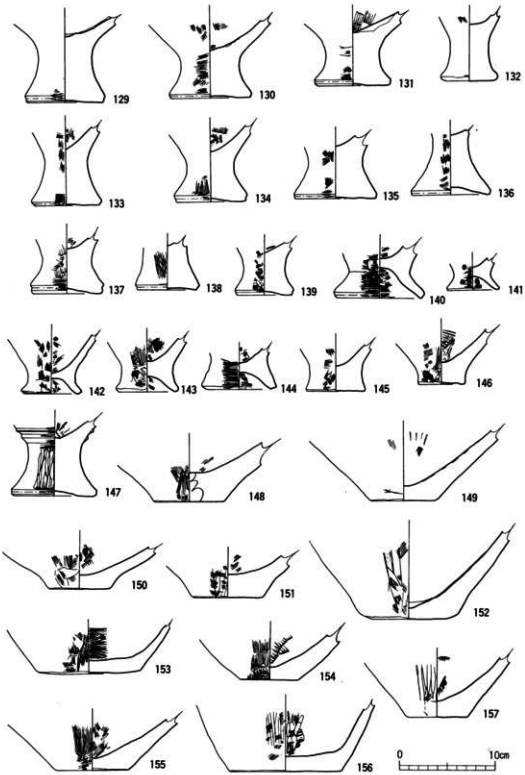
167～219は壺形土器に分類される。うち、219は底部破片である。これらの土器は、口縁部の形状が直線的に立ち上がるもの、口縁部内面に断面三角形貼付突帯を廻らすもの、無頸を呈するもの、口縁部がくの字状に開く器形のもの、頸部から口縁部へ外反する器形で、強くくの字に外反するもの、頸部から口縁部へ外反する器形で、朝顔形に緩やかに開くもの、頸部から口縁部へ外反する器形で、やや外反が弱いもの、口縁部の外面直下に突帯を廻らし、口縁部が二叉状を呈するもの、口縁部端面が肥厚拡張され、その拡張部に凹線文が施されたもの、櫛描施文具による沈線文・波状文が施されたものなどの器形がみら



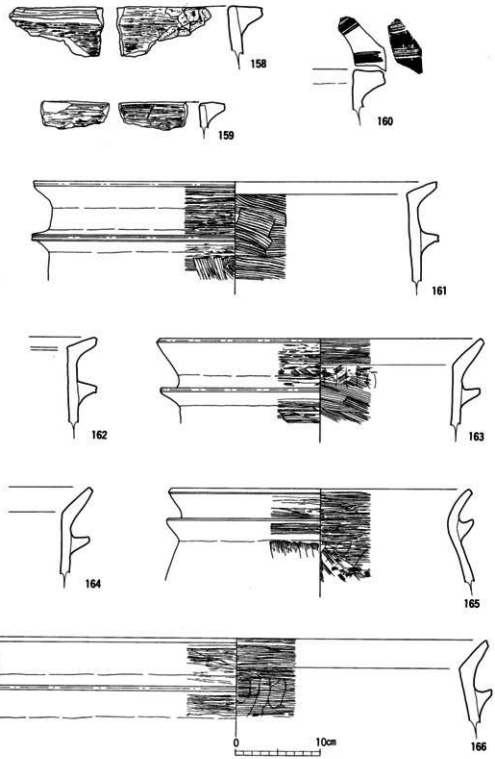
第15図　出土土器実測図（4）



第16図　出土土器実測図（5）



第17図　出土土器実測図 (6)



第18図　出土土器実測図 (7)

れる。突帯については、肩部及び胴部に断面三角形貼付突帯をもつもの、断面M字状貼付突帯をもつもの、いずれかの部位に断面三角形貼付突帯と断面M字状貼付突帯をもつものなどがある。

蓋形土器（第21図、220～226）

220～226は蓋形土器に分類される。すべての資料が口縁部を欠損している。つまび部の裾端部が窪んで凹線状を呈するもの（222）、丸味を帯びるもの（220・221・223・224・226）があり、つまび部の上端がやや丸味を帯びるもの（220）、やや平底状のもの（221）、上げ底ふうに作られたもの（222～226）がある。225以外の資料は、つまみ部付近がくびれそりを認めるものである。

鉢形土器（第21図、227・第22図、231）

227・231は鉢形土器に分類される。227は、復元完形品で、口縁径16.8㎝、底径3.1㎝、器高10.3㎝を測る。底部より外方へ大きく開きながら立ち上がり口縁部は直口する器形で、口縁部外側に断面M字状の突帯を廻らし、口唇端面は窪んで凹線状を呈し、内面は黒褐色の色調である。231は、復元完形品で、口縁径17.2㎝底径4.5㎝、器高15.3㎝を測る。底部より外方へ大きく開きながら立ち上がり口縁部が大きくくの字状に外反し、口唇端部は丸味を帯び、口縁部内面には稜をもつ器形である。

底部（第22・第23図、232～279）

ここで扱う底部資料（232～279）は弥生時代終末から古墳時代終末にかけての時期が比定されるために、この項で取り扱った。なお、口縁部資料との対応が困難なために、この底部破片が甕形土器のものか鉢形土器か不明である。これらの資料は、底部より外方へ大きく開きながら立ち上がるもの、底部より外方へ直線的に立ち上がるものなどがある。底部の形状は、平底を呈し、裾が外方へ張り出するもの、平底を呈し、裾が外方へく張り出しをもたないもの、あげ底状を呈し、裾が外方へ張り出すもの、あげ底を呈し、裾が外方へ張り出すもの、あげ底状を呈し、裾が外方へ張り出しのなもの、くびれ部をもたず、平底を呈するもの、くびれ部をもたず、あげ底状を呈するものなどがある。

高坏形土器（第24図、280～297）

280～297は高坏形土器に分類される。これらの資料は、大形のものと小形のものとがある。

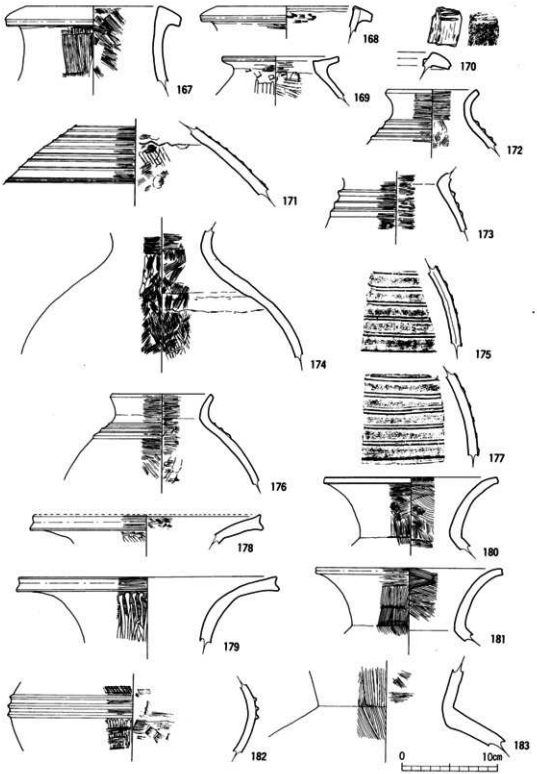
280・282～284、286・287は、大小の違いはあるが、同タイプの坏部を呈する。280は、器高24.6㎝、口縁径31.2㎝を計る。坏部は、ゆるやかに外反する口縁部をもち、体部に稜を有する完形品で、丸い透しを施している。282も同様な器形の資料で、口縁径28.8㎝を計り、裾部が欠損している資料である。288～297は脚部の破片で、289・290・292・294は丸い透しを施している。

器台形土器（第25図、298）

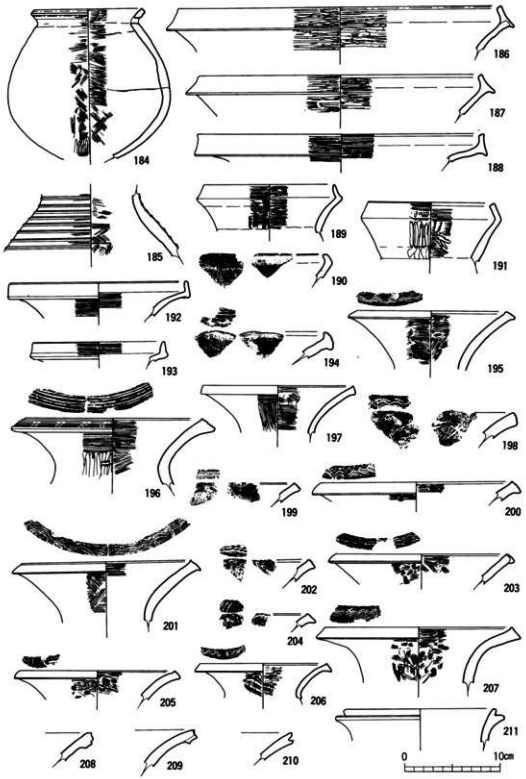
298は器台形土器に分類される。中央部を最狭として上下に拡がりを見せるもので、朝顔状に開く円筒形を呈し、中央以下に四孔を一段として二段の円形透しを有している器形が考えられる資料で、上部を欠損している。

埴形土器（第25図、299）

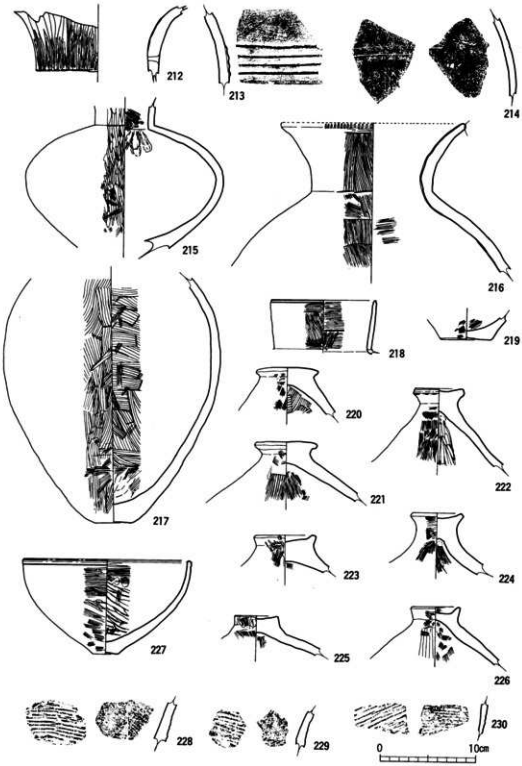
299は埴形土器に分類される。



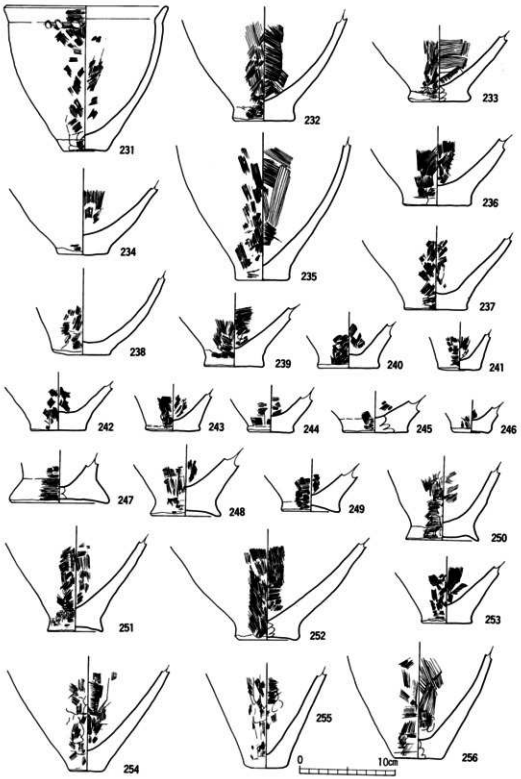
第19図　出土土器実測図 (8)



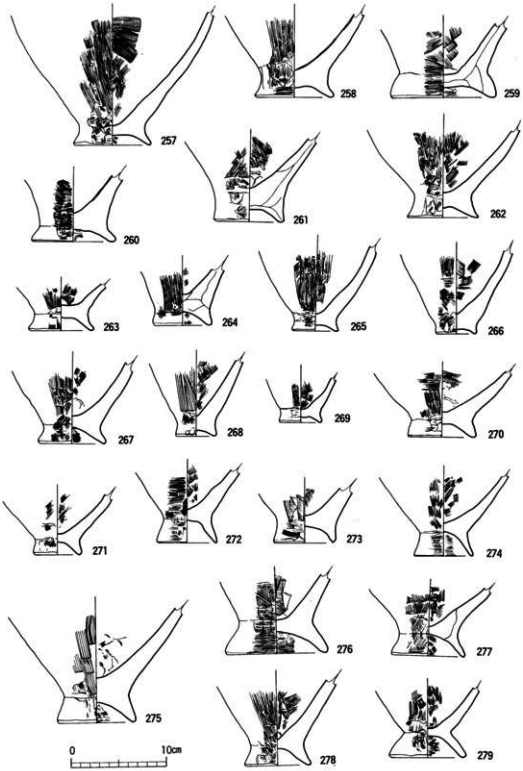
第20図　出土土器実測図（9）



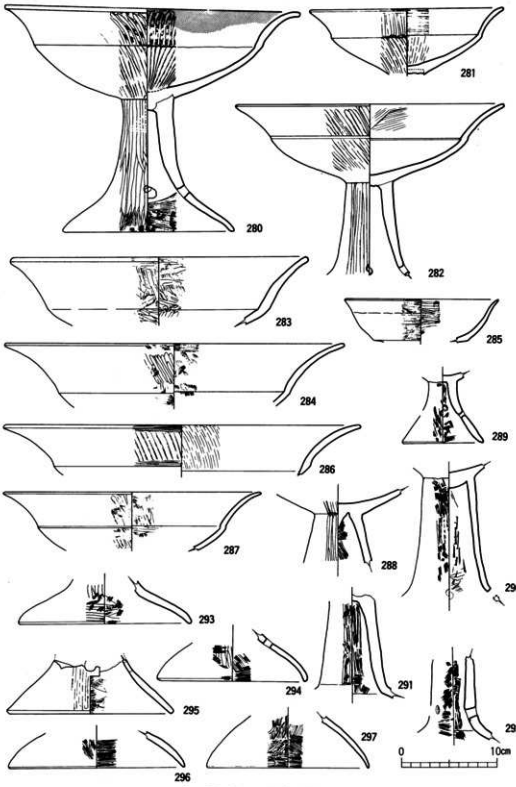
第21図　出土土器実測図 (10)



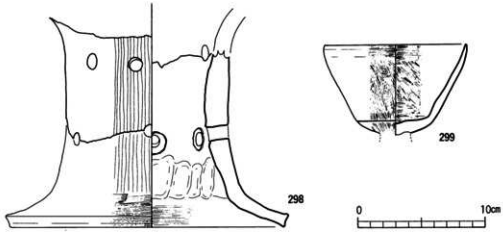
第22図　出土土器実測図 (11)



第23図　出土土器実測図 (12)



第24図　出土土器実測図 (13)



第25図　出土土器実測図 (14)

第3節　古壌時代の遺物

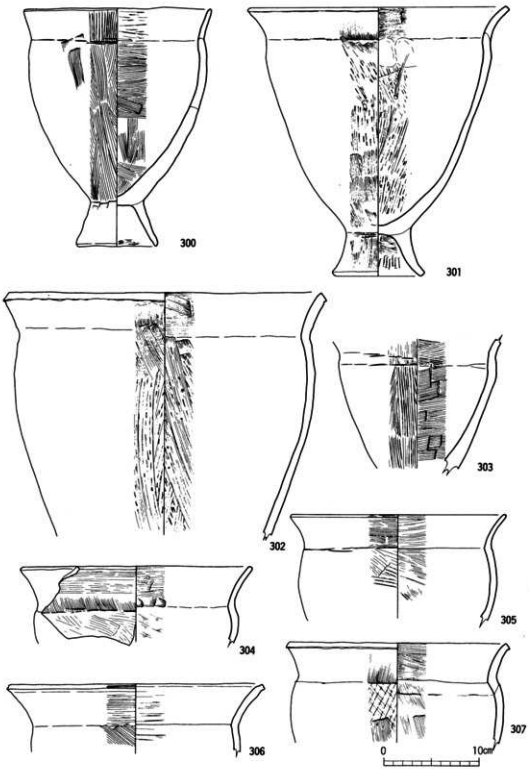
1．土器

古墳時代の土器には、甕形土器・壺形土器・鉢形土器・高坏形土器・坩形土器・ミニチュア土器などが出土している。

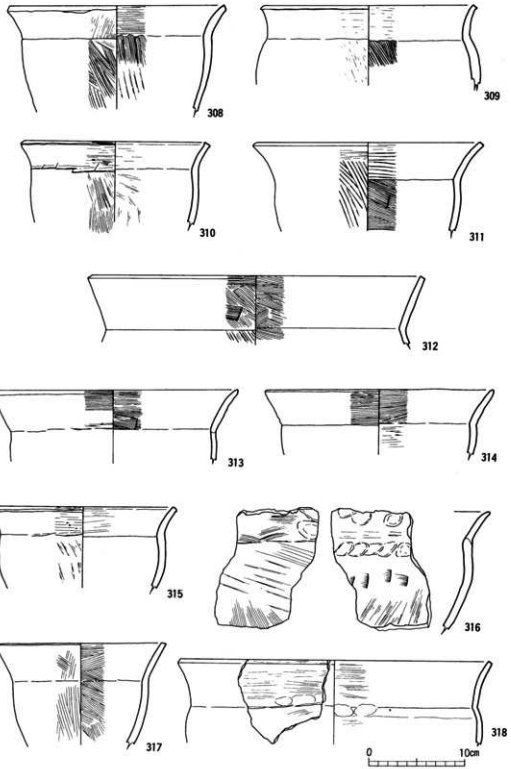
甕形土器（第26～第31図、300～369）

300から369は甕形土器に分類される。そのうち、335から341は突帯を貼り付けたものであり、342から369は底部である。

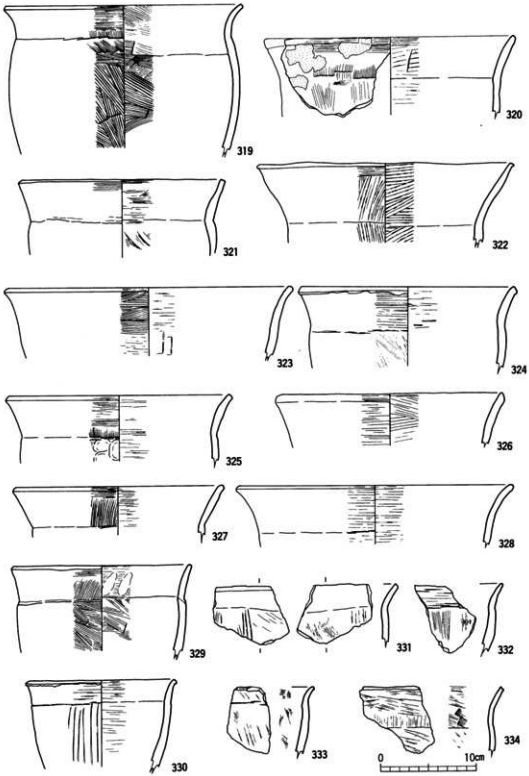
300は口縁径19.8㎝、底部8.6㎝、器高25.2㎝を測る。やや小型の器形で、胴部はあまり張らずに立ち上がる。屈曲部は緩やかであり、口縁部は直線的に外反する。口縁部外面はヘラ状の工具で、縦方向にかき上げている。(以下「かき上げ」と略す)。外面の上半分には煤が付着し、ふきこぼれたと思われる幅4㎜ほどの痕跡が2～3条観察される。301は口縁径27.6㎝、底部9.8㎝、器高28.3㎝の完形品である。口縁部はかき上げを施し、反りぎみに外反する。内面はヘラ削りで器面調整を行い、外面の胴部上半部にもヘラ削りの調整が観察される。302は復元口径35㎝、外面はやや強く押さえたハケ目であり、砂粒の移動も見られ、一見ヘラ削り状である。口縁部は、平たい工具で平坦にナデで押さえており、はみ出た粘土が下に垂れている。304から307・311は、屈曲部の内側に明瞭な稜線を持つものである。305・307はかき上げにより胴部との境に段を持つ。308から322は、明瞭な稜線は持たないが、やや屈曲を残すものである。口縁部外面はかき上げの後横ナデを施したものが多く、胴部との境に段を持つものがある。口唇部は平たくナデたものや、丸く調整したものなどがある。309は胴部が張っており、口縁部径より胴部の最大径が上回る。321は内面に胴部と口縁部を圧着するための指頭痕がよく残っている。口唇部も指でつまんでいる。319は内外面にハケ目調整のあとが明瞭に観察される。321の口縁部内面には粗痕が



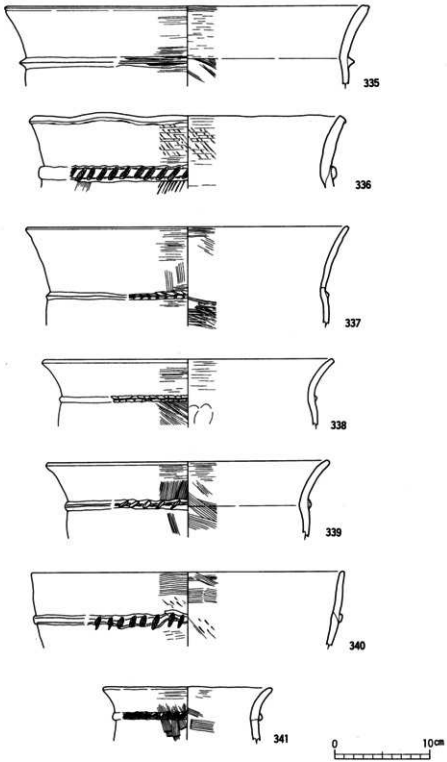
第26図　出土土器実測図 (15)



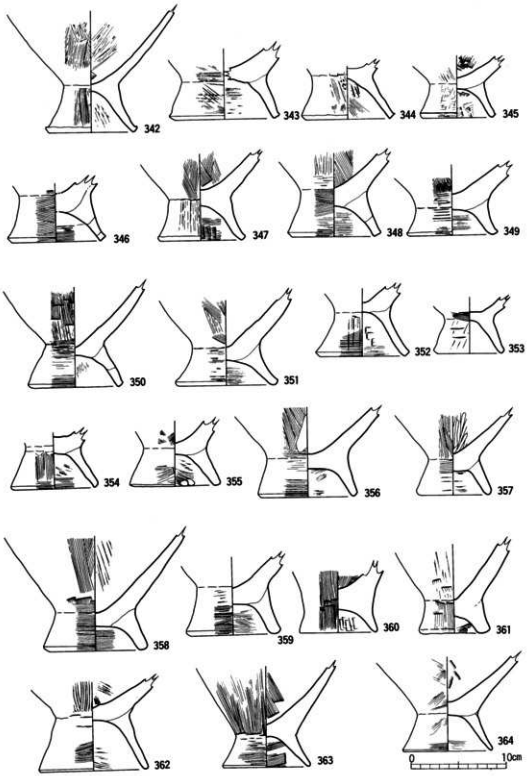
第27図　出土土器実測図 (16)



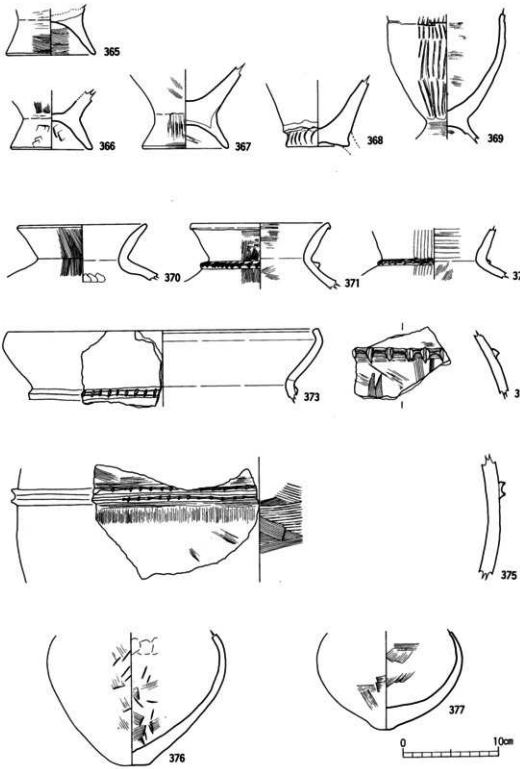
第28図　出土土器実測図 (17)



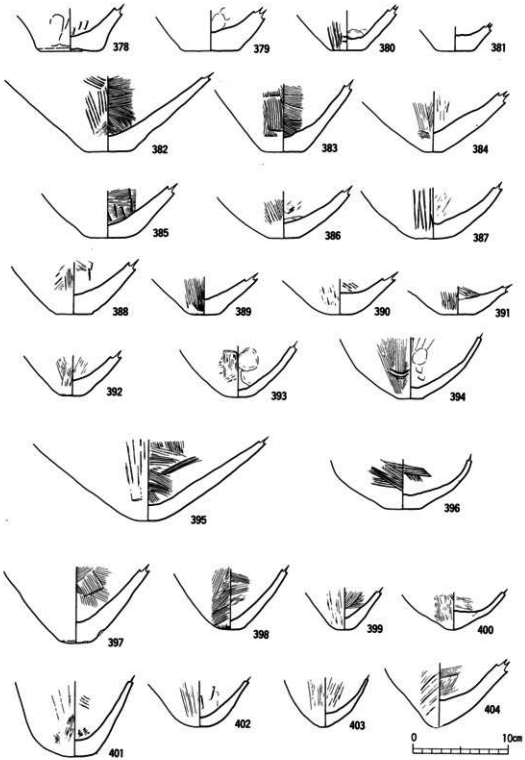
第29図　出土土器実測図 (18)



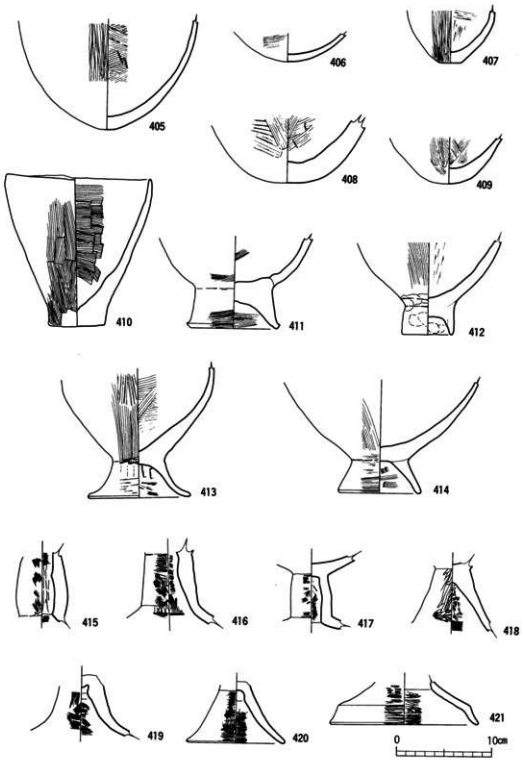
第30図　出土土器実測図 (19)



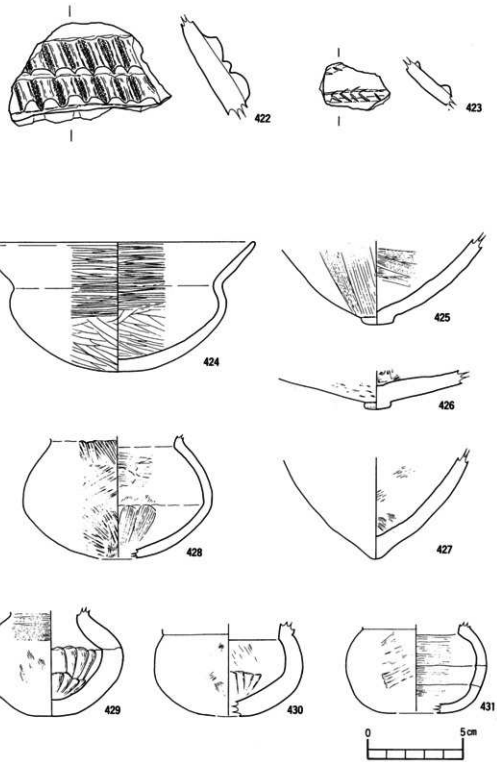
第31図　出土土器実測図 (20)



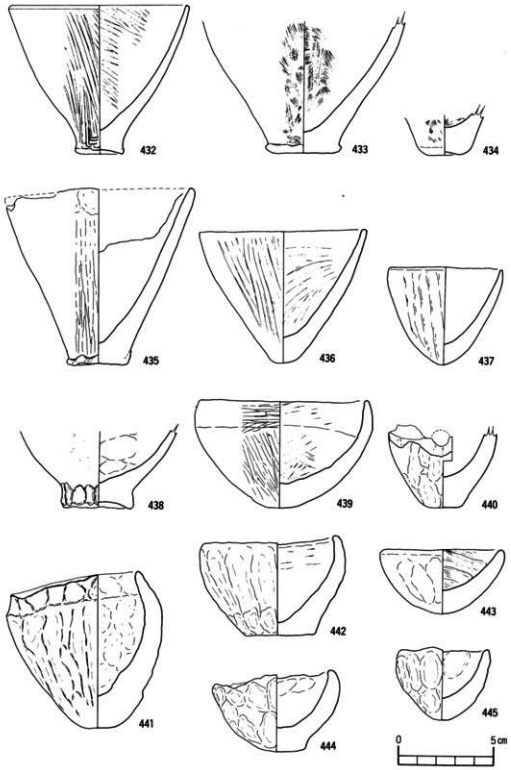
第32図　出土土器実測図 (21)



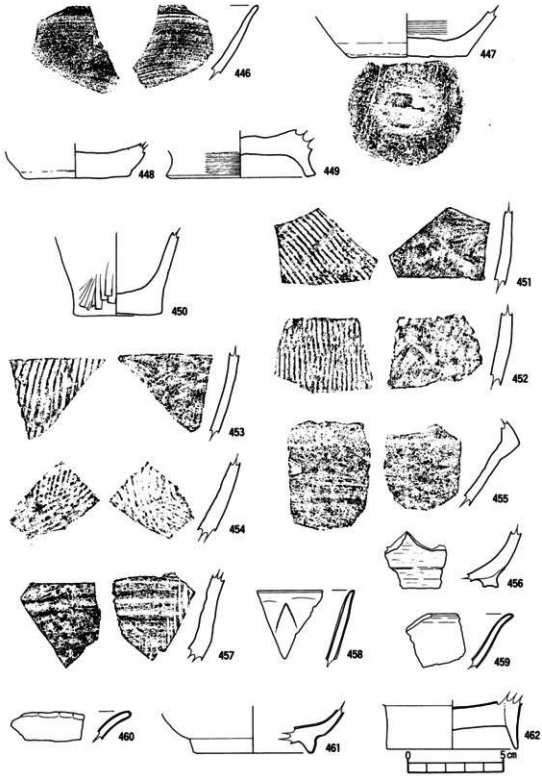
第33図　出土土器実測図 (22)



第34図　出土土器実測図 (23)



第35図　出土土器実測図 (24)



第36図　出土土器実測図 (25)

残っていた（図版６）。323から334は、屈曲がほとんどなく、緩やかに外反するものである。胴部と口縁部の境が明瞭でないものもある。器面調整はこれまでのものとほとんど同じである。330は口縁径16㎝の小型のもので、明赤褐色をしており、胎土には大小の礫が混入している。331から333は、口縁部の長さが1.5㎝～２㎝で、他に比べて短い。335は一条の三角突帯、336・339～341は刻目突帯を貼り付けたものである。刻み目はヘラ状のものと、ヘラまたは棒状のものに布を巻いて押しつけたものがある。337・338は紐縄状突帯を貼り付けたものである。340は口縁部は外反せず、やや内湾ぎみに直行するものである。341は復元口径17.8㎝の小型のものである。342から369は底部である。脚はほぼ直線的に伸び、あまり高くはない。端部は丸くおさまるものの他に、ヘラ状の工具で平坦にナデて押さえ、粘土が上にはみだしているものがある。368は胴部と脚部の接合部分ではずれており、製作過程がうかがえる資料である。

壺形土器（第31～33図、370～409　第34図、422・423）

370から409は壺形土器に分類される。そのうち、371から375・422・423は突帯を貼り付けたものであり、378から409は底部である。

371と372はくびれ部に刻目突帯を貼り付けている。373は口縁部は外反し、端部で内側に屈曲する。375はM字状の刻目突帯を貼り付けている。422は幅広の刻目突帯を貼り付けたものである。板状の工具に布を巻いて、刻みを施している。

底部はやや平底に近いものから、丸底あるいは尖底に近いものがある。378は平底で、ややあげ底になっている。379から395は接地面がやや平坦になっている。胴の開きも大きい。397から404は丸底から尖底で、胴の開きもやや狭い。405から409は丸底である。

鉢形土器（第33図、410～414）

410から414は鉢形土器に分類される。410は口縁径15.2㎝、底部径6.0㎝、器高16.3㎝の完形品である。平底で口縁部がやや内湾する。器面調整は外面は縦方向のハケ、内面は横方向のハケである。411から414は脚をもつもので、413の脚部は外反しながら開く資料である。

高坏形土器（第33図、415～421）

415から421は高坏形土器の脚部出ある。415・417は筒状で中央部が膨らむものである。418から420は裾部が緩やかに外開きする資料で、421は端部が屈曲するものである。

坩形土器（第34図、424～426）

424から426は坩形土器である。424は胴部は丸みを呈し、頸部はしまり口縁部は外反する。底部は丸底である。内外面ともにていねいなヘラみがきで仕上げている。胎土はきめ細かい。425・426は底部に突起を持つもので、426は胴部の開きが大きく、特徴的である。

ミニチュア土器（第34図、427～445）

427から445はミニチュア土器に分類される。そのうち、438・440から445は手づくね土器である。

428から431は小壺である。丸底で口縁部を欠くが、頸部のしまり具合にやや差がある。432から436は小型の鉢形土器である。432・433・435は平底で、胴部はほぼ直線的に立ち上がる。432は精選した細かい白粘土を使用し、細い単位の調整具でていねいに仕上げてある。436・437の底部は、尖底である。439は丸底で、胴部は丸みを帯びた鉢形土器である。

手づくね土器は、鉢形の器形のものが多い。438は高台を貼り付けている。440には穿孔を有す。441はかなりいびつであるが、口唇部は指でつまんで一段薄く仕上げている。442から445は盃に類似した資料である。

第4節　古代・中世の遺物

土師器（第36図、446～450）

447と448はヘラ切り底である。450は胎土が土師質のものであるが、全体の器形は不明である。

須恵器（第36図、451～456）

須恵器は外面は格子目の叩き目文、内面は同心叩き目文を施すものが多い。自然灰釉のかかったものもある。455は13世紀頃の東播系のこね鉢である。456は9世紀頃の坏の底部である。

陶器（第36図、457）

457は備前焼のすり鉢である。

磁器（第36図、458～462）

458から461は青磁である。458は青磁の蓮花文碗である。460は稜花皿である。461は碗の底部であるが、竜泉窯のものと思われる。これらの青磁は15世紀頃のものであると考えられる。462は白磁の碗の底部である。13世紀前半の、端反り口縁を持つものと思われる。

第２表　出土土器観察表

番号	出土区	外面調整	内面調整	胎　土
1	A-2	ナデ	ナデ	A・B・C・D
2	A-12	ナデ	ミガキ？	A・B
3	A-13	不明	不明	A・B・C
4	A-12	ナデ	ナデ	A・B・C・D
5	A-12	不明	ナデ	A・B・D
6	A-10	ヘラミガキ	ナデ	A・B・C・D
7	A-7・8	ナデ	ナデ	A・B・C・D
8	A-4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・C・D
9	A-4	ナデ	不明	A・B・C・
10	A-11	ヘラミガキ	ナデ	A・B・C・D
11	A-8	ナデ、ヘラミガキ	ナデ	A・B・C・D
12	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
13	A-6	ナデ、ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・C・D
14	A-11	ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・C・D
15	A-5	ナデ	不明	A・B・C・D
16	A-5	ヘラミガキ	ナデ(撫過)	A・B・C
17	A-5	ヘラミガキ	ナデ(撫過)	A・B・C
18	A-7・8	ヘラミガキ	ナデ	A・B・C
19	A-4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・C・D
20	A-12	ナデ	マメツ	A・B・D
21	A-4	不明	不明	A・B・C・D
22	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
23	A-12	ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・C・D
24	A-11	ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・C・D
25	A-8	ナデ	マツメ	A・B・C・D
26	A-8	ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・C・D
27	A-4	擦目圧痕	ナデ	A・B・C
28	A-8	擦目圧痕	ナデ	A・B・C
29	A-4	擦目圧痕	ナデ	A・B・C
30	A-12	擦目圧痕	ナデ	A・B・C
31	A-11	ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・C
32	A-10	ヘラミガキ	ナデ、ヘラミガキ？	A・B・D
33	A-4	不明	不明	A・B・C・D
34	A-11	ナデ、ヘラミガキ	ナデ、ヘラミガキ	A・B・C・D
35	A-12	ナデ	ナデ、ヘラミガキ	A・B・D
36	A-4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・C・D
37	A-11	ヘラミガキ	ナデ	A・B・C・D
38	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C・D
39	A-12	ナデ？	ナデ？	A・B・C・D
40	A-12	ナデ	ナデ	A・B
41	A-12	ヘラミガキ	ナデ、ヘラミガキ	A・B・C・D
42	A-13	ナデ	ナデ	A・B
43	A-1	ナデ	ナデ	A・B
44	A-7・8	ナデ	ナデ	A・B・C・D
45	A-8	ナデ、ヘラミガキ	ナデ、ヘラミガキ	A・B・C
46	A-11	ナデ、ミガキ	ナデ	A・B・C・D
47	A-13	ナデ	ナデ	A・B・C
48	A-7・8	ナデ	ナデ	A・B・C・D
49	A-12	ナデ、ミガキ	ヘラミガキ	A・B・C・D
50	A-4・5	不明	不明	A・B・C
51	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
52	A-12	指頭による	指頭による	A・B・C・E
53	A-4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・C
54	A-12	ヘラ、ナデ	ヘラ、ナデ	A・B・C・D
90	A-10	ナデ	ナデ	A・B・C・D・E
91	A-7・8	ナデ	ナデ	A・B・C・D
92	A-5	ナデ	マメツ	A・B・C・D
93	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
94	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C
95	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C・D
96	A-8	ナデ	ナデ	A・B・C・D
97	A-12	ナデ	ナデ	A・B・D
98	A-10 A-12	ナデ	ナデ	A・B・C・D
99	A-7・8	ナデ	ヘラミガキ	A・B・C・D
100	A-8	ナデ	ナデ	A・B・D
101	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
102	A-5	ナデ	ナデ	A・B・D
103	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
104	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
105	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
106	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C
107	A-4	ナデ(マメツ)	ナデ(マメツ)	A・B・C・D
108	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D
109	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C・D
110	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
111	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
112	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C・D
113	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
114	A-5	マメツ	マメツ	A・B・C・D
115	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
116	A-3	ナデ	ナデ	A・B・C・D
117	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
118	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C・D
119	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C・D
120	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C・D
121	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C・D
122	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
123	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
124	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
125	A-4	ナデ	指頭調整痕	A・B・C・D

凡例：石英A　長石B　角閃石C　金雲母D　軽石E

第３表　出土土器観察表

番号	出土区	外面調整	内面調整	胎　土	番号	出土区	外面調整	内面調整	胎　土
126	A-4	ナデ，ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・D	171	A-5	ナデ	ナデ(マメツ)	A・B・C・D
127	A-4	ヘラミガキ	ナデ，ヘラミガキ	A・B・C・D・E	172	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C・D・E
128	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C・D	173	A-5	ヘラナデ，ナデ	ナデ	A・B・C・D・E
129	A-5	ナデ	不明	A・B・D	174	A-4	ヘラナデ，ナデ	ヘラナデ，ナデ	A・B・C・D
130	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C・D	175	A-4	ヘラミガキ	ナデ	A・B・C・D
131	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C・D	176	A-4	マメツ	マメツ	A・B・C・D
132	A-4	マメツ	マメツ(一部ナデ)	A・B・D	177	A-4	ヘラミガキ	ナデ	A・B・C・D
133	A-4	ナデ(マメツ)	ナデ	A・B・D	178	A-4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・C・D
134	A-7・8	ナデ	マメツ	A・B・C・D	179	A-4	ヘラミガキ	ミガキ？	A・B・C
135	A-5	ナデ(マメツ)	ナデ(マメツ)	A・B・D	180	A-4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・C
136	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D	181	A-4	ハケメ，ナデ	ハケメ，ナデ	A小礫
137	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D	182	A-5	ヘラミガキ	ナデ	A・B・C・D・E
138	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C	183	A-5	ハケメ	ハケメ	A・B・D
139	A-10	ナデ	ナデ，ヘラミガキ	A・B・C・D	184	A-4	ヘラミガキ，ナデ	ナデ	A・B・C・D・E
140	A-7・8	ナデ	ナデ	A・B・D	185	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C・D・E
141	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D	186	A-4	ナデ，ヘラミガキ	ナデ，ヘラミガキ	A・B・C・D
142	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D	187	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
143	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D	188	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
144	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D	189	A-4	指ナデ	ナデ	A・B・C・D
145	A-5	ナデ	ナデ	A・B・D	190	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C・D
146	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C・D	191	A-4	ヘラミガキ	ヘラ，ナデ	A・B・D
147	A-12	ヘラミガキ	ヘラ？	A・B・C・D	192	A-5	ナデ(マツメ)	ナデ(マメツ)	A・B・C
148	A-5	ナデ	ナデ？	A・B・C・D	193	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
149	A-4	不明	ヘラミガキ	A・B・C・D	194	A-11	ナデ	不明	A・B・D
150	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D	195	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D
151	A-5	ナデ，ヘラミガキ	ナデ，ヘラミガキ	A・B・C・D	196	A-4	ナデ，ヘラミガキ	ナデ	A・B・D
152	A-4	ナデ，ヘラミガキ	ハクラク	A・B・C	197	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
153	A-1	ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・C・D	198	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D
154	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D	199	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C
155	A-4	ヘラミガキ	ナデ	A・B・D	200	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
156	A-4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・D	201	A-5	ナデ	ナデ	A・B・D
157	A-4	ヘラミガキ	ナデ	A・B・C・D	202	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D
158	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C・D	203	A-2	ナデ	ナデ，指ナデ	A・B・C・D
159	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C	204	A-3	ナデ	ナデ	A・B・D
160	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C・D	205	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
161	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D	206	A-4	ナデ	ヘラミガキ	A・B・D
162	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C・D	207	A-4	ナデ，ヘラミガキ	ナデ，指ナデ	A・B・C・D
163	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D	208	A-4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・D
164	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D	209	A-4	ナデ	ナデ，ヘラミガキ	A・B・C・D
165	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D	210	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
166	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D	211	A-1	ナデ	ナデ	A・B・C・D
167	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C・D・E	212	A-4	ハケメ，ナデ	ハケメ，ナデ	B・C
168	A-12	ナデ(マメツ)	ヘラミガキ	A・B・C・D	213	A-5	ヘラミガキ	ナデ	A・B・C・D・E
169	A-4	ナデ，ヘラミガキ	ナデ	A・B・C・D	214	A-12	ナデ	ナデ	A・B・C・D
170	A-8	ナデ	ナデ	A・B・C・D	215	A-4	ヘラミガキ	ナデ	A・B・C・D

第4表　出土土器観察表

番号	出土区	外面調整	内面調整	胎　土	番号	出土区	外面調整	内面調整	胎　土
216	A-4	ハケメ	ハケメ	A・B・C	261	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D
217	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D	262	A-4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・C・D・E
218	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D	263	A-4	ナデ	ナデ	A・B・E
219	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D	264	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
220	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D	265	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D
221	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D	266	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D
222	A-4	ナデ	ヘラミガキ	A・B・C・D	267	A-5	ナデ	指ナデ	A・B
223	A-5	ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・C・D	268	A-5	ナデ	ナデ	A・B・D
224	A-12	ナデ	ナデ	A・B・C・D	269	A-5	ナデ	ナデ	A・B・D
225	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D	270	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
226	A-4	ナデ	指紋の付着	A・B・D	271	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C・D
227	A-4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・C・D	272	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C
228	A-5	タタキ	ナデ	A・B・C・D	273	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D
229	A-5	タタキ？	ナデ	A・B・D	274	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D
230	A-5	タタキ	ナデ	A・B・C	275	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D
231	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D	276	A-7・8	ナデ	ナデ	A・B・D
232	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D	277	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D・E
233	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D	278	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D
234	A-4	不明	ナデ	A・B・D	279	A-5	ナデ	ナデ	A・B・D
235	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C・D	280	A-4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・D
236	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D	281	A-4	ヘラミガキ	ハケミ、ヘラ、ナデ	A・B・C・D
237	A-7・8	ナデ	ナデ	A・B・C・D	282	A-4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・C
238	A-4	ナデ	マツメ	A・B・C・D	283	A-4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・C・D
239	A-4	ナデ	指紋の付着	A・B・C・D	284	A-4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・C
240	A-7・8	ナデ	ナデ	A・B・C・D	285	A-11	ナデ	ナデ	A・B・D
241	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C・D	286	A-4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	A・B・C
242	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D	287	A-4	マメツ	マメツ	A・B・D
243	A-7・8	ナデ	ナデ	A・B・C・D	288	A-4	マメツ	マメツ	A・B・C
244	A-10	ナデ	ナデ	A・B・C・D	289	A-5	ナデ	ナデ	A・B・D
245	A-5	ナデ	ナデ	A・B・D	290	A-4	マメツ	マメツ	A・B・C
246	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D	291	A-4	ヘラミガキ	ナデ	A・B・D
247	A-7・8ミノ	ナデ	マツメ	A・B・D	292	A-5	マメツ	ナデ	A・B・C
248	A-5	ナデ	ナデ	A・B・C・D	293	A-4	ヘラミガキ	ナデ	A・B
249	A-3	ナデ	ナデ	A・B・C・D	294	A-4	マメツ	マメツ	A・B・C
250	A-7・8ミノ	ナデ	ナデ	A・B・C・D	295	A-4	ヘラミガキ	ハケミ	A・B
251	A-5	ナデ	ナデ	A・B・D	296	A-4	マメツ	ヘラミガキ	A・B・C
252	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D	297	A-4	ヘラミガキ、ナデ	ナデ	A・B・C
253	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D	298	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D
254	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D	299	A-4	ヘラミガキ、ナデ	ナデ	
255	A-4	マメツ	マメツ	A・B・C・D					
256	A-4	ナデ	ナデ	A・B・D					
257	A-5	ナデ	指ナデ	A・B・C・D					
258	A-4	ナデ	ナデ	A・B・C・D					
259	A-7・8	ナデ	ナデ	A・B・C・D					
260	A-7・8	ナデ	不明	A・B・C・D					

第５表　出土石器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	器種	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	石材	備考
第10図	55	A-5	局部磨製石斧	10.1	4.6	1.6	100	頁岩	一部刃部及び基部を欠損する
	56	A-5	磨製石斧	11.7	4.8	2.4	200	頁岩	使用痕跡あり
	57	A-4	磨製石斧	6.8	6.1	1.0	60	頁岩	偏平で基部側約半分を欠損する
	58	A-5	有肩石斧	13.6	7.4	1.9	180	頁岩	一部刃部を欠損する
	59	A-4	有肩石斧	12.7	7.4	1.4	140	頁岩	刃部を欠損する
	60	A-1	有肩石斧	7.5	6.1	1.7	95	頁岩	刃部側約半分を欠損する
	61	A-7-8	有肩石斧	11.2	7.5	1.1	90	頁岩	刃部を欠損する
	62	A-4	有肩石斧	6.0	7.2	1.5	60	頁岩	刃部側約半分を欠損する
	63	A-7-8	有肩石斧	11.3	7.7	1.8	175	頁岩	一部刃部及び片側縁を欠損する
第11図	64	A-4	有肩石斧	7.0	8.7	1.2	58	頁岩	一部基部側縁と刃部側約半分以上を欠損する
	65	A-2	有肩石斧	6.9	7.0	1.2	85	頁岩	刃部側約半分を欠損する
	66	A-4	有肩石斧	8.2	6.0	2.4	160	頁岩	基部のみ残存する
	67	A-7-8	有肩石斧	5.8	6.9	1.1	55	頁岩	一部基部と刃部側大半を欠損する
	68	A-4	有肩石斧	8.2	7.6	1.4	110	頁岩	基部側約半分及び刃部を欠損する
	69	A-3	有肩石斧	5.5	7.0	1.9	95	頁岩	基部側約半分及び刃部を欠損する
	70	A-7-8	有肩石斧	6.2	6.3	1.0	43	頁岩	基部側約半分刃部を欠損する
	71	A-4	有肩石斧	11.7	7.9	1.1	125	砂岩	基部のみを欠損する
	72	A-4	有肩石斧	10.5	4.0	0.8	45	頁岩	基部及び片側縁を欠損する
	73	A-1	有肩石斧	5.6	5.4	1.3	55	頁岩	一部刃部及び基部側大半を欠損する
	74	A-3	有肩石斧	7.5	6.4	2.0	80	頁岩	基部側約半分を欠損する
第12図	75	A-7-8	砥石	10.6	3.3	2.7	130	頁岩	柱状の形状で一部欠損擦痕あり
	76	A-4	凹石	9.1	4.2	4.3	180	砂岩	棒状の形状で一部欠損兼敲石
	77	A-4	磨石兼敲石	9.2	8.8	7.4	860	砂岩	周縁部は帯状に敲打痕あり兼凹石
	78	A-7-8	凹石	10.7	6.2	6.8	600	花崗岩	兼磨石の機能あり
	79	A-7-8	凹石	6.8	6.9	2.9	205	花崗岩	約半分を欠損する
	80	A-5	凹石兼磨石	10.1	8.2	6.6	800	花崗岩	大きく窪む
第13図	81	A-7-8	敲石兼磨石	13.5	10.4	4.6	895	砂岩	兼凹石
	82	A-7-8	敲石兼磨石	10.8	5.4	5.4	340	砂岩	兼凹石約半分欠損する
	83	A-5	凹石兼敲石	11.2	10.5	4.7	770	花崗岩	兼磨石
	84	A-1-3	剥片	5.4	3.0	1.7	25	頁岩	溝状遺構内埋土出土
	85	A-4	砥石	8.7	5.6	1.4	100	砂岩	一部を欠損する、擦痕あり
	86	A-5	石皿	14.8	11.0	5.9	115	砂岩	若干窪む、大半を欠損する
第14図	87	A-5	石皿	19.4	10.2	8.5	1995	砂岩	大半を欠損する
	88	A-2	石鋸	6.6	10.0	2.3	160	滑岩	大半を欠損する

第Ⅵ章　まとめ

東田遺跡は沖積平野に所在する遺跡で、縄文時代晩期から弥生時代、古墳時代、古代・中世までの遺物と溝状遺構が検出された。特に、縄文晩期終末から弥生前期初頭にかけての資料については、大隅半島における弥生文化の波及を知る手がかりとなるであろうし、瀬戸内系・畿内系・東九州系の土器は、当地との交流を示す好資料といえる。

縄文時代

ここでは縄文時代として項をもうけたが、これらの資料は縄文晩期終末から弥生時代前期初頭にかけての刻目突帯文土器や孔列土器などの好資料がある。そのほとんどが小破片で、全体的な器形を知り得るものはほとんどなく、傾きについても疑問が残る資料ばかりである。また、口縁部の傾きについは、第7・8図の資料で、6は直口気味か若干外傾気味に、26は内傾、31は外傾、35・37はさらに内傾する資料となる可能性が高い。

刻目突帯文の部位が口縁部のみに施すものと屈曲する肩部にも施すものとがあるが、全体像は不明である。その突帯は、上下両側から押さえて施すため断面が二等辺三角形状になるものが大半で、上側や下側からのみ押さえるものはほとんど見られない。なかには、その断面がかまぼこ状を呈するものも見られる。突帯上の刻み目には、ヘラをねかせて突帯に押しつけて刻むもの、ヘラを垂直に立てて深く刻むものや指で刻むものなどがある。

これまで県下の刻目突帯文土器の出土地については、鹿児島市の釘田・脇田亀ヶ原・大竜・一の宮遺跡、松元町東昌寺遺跡、東市来町南力石原遺跡、吹上町の黒川洞穴・上草田・今田A・塩水流遺跡、金峰町の阿多・高橋貝塚・塘・松木園・上焼田・下原遺跡、川辺町の堂山・南田代・知覧町永野遺跡、指宿市の西原迫・横瀬・大渡・橋牟礼遺跡、加世田市上加世田遺跡、枕崎市山内遺跡、高尾野町放光寺遺跡、東郷町後ヶ原遺跡、祁答院町平田遺跡、川内市成岡遺跡、串木野市井出下遺跡、里村中町馬場遺跡、蒲生町竹牟礼遺跡、姶良町の小瀬戸・稲荷橋遺跡、加治木町仏石遺跡、菱刈町山下遺跡、国分市妻山元遺跡、末吉町の上中段・通山上川路・後迫・箱根・真方入口遺跡、大隅町の八合原・稲葉崎遺跡、志布志町の橡野・片野洞穴・二反野遺跡、輝北町徳光ヶ丘遺跡、鹿屋市の水の谷・榎木原遺跡、吾平町の山内原・大牟礼・四方高迫遺跡、根占町の千束・貰見原遺跡、南種子町一陣長崎鼻貝塚、龍郷町ウフタ遺跡などが知られている①。

刻目突帯文期の深鉢形土器に孔列土器があり、鹿屋市柿窪遺跡をはじめ、蒲生町竹牟礼遺跡、そして本例と、南部九州に刻目突帯文期まで「孔列」を施される資料の事例が増加した。そのほか、黒川期の出土例として、鹿屋市の榎木原・榎木崎B・水の谷遺跡、志布志町小迫遺跡、人吉市アンモン山遺跡、このほか都城市中尾山馬渡遺跡などが知られている②。

石器については、一括してこの項で取り扱った。特に、有肩の扁平打製石斧は、縄文時代晩期から弥生時代にかけて出土することが知られている。鹿屋市水の谷・榎木原遺跡、加世田市上加世田遺跡などでは晩期の土器に、末吉町上中段遺跡では刻目突帯文土器に、大根占町轟ヶ木迫遺跡では弥生時代前期末から中期初頭の土器に伴って出土している③。

弥生時代

ここで扱った資料には、甕形土器、大型甕形土器、壷形土器、蓋形土器、鉢形土器、高坏形土器、器台形土器、壇形土器などがある。特に、底部破片については、器種間の資料との対応が困難である。90～111は中期中葉ごろに比定されるが、90～100は中葉より若干古い要素をもつ資料である。112～128は中期末から後期にかけての資料で、126・127は後期終末が考えられるものである。129～157は底部破片で、129～144は甕、148～157は大甕、145～146は鉢、219は壷が考えられる。158～166は大甕の破片で、その大半の資料は中期に、165は後期に比定される。167～217は壷で、中期中ごろから後期末が考えられ、180・181・184は後期、186～193の複合口縁部をもつもので安国寺系土器に、弥生終末から古墳時代初頭が考えられる[2]。193・194は瀬戸内系土器で、195～207は鹿屋市高付遺跡のⅣ類に比定できる[4]。212～218は後期が、228～230は東日本系の後期の資料が考えられる。232～279の底部は、弥生時代終末から古墳時代初頭に位置付けられるものである。228～297・298は安国寺式系土器で、弥生後期終末から古墳初頭が考えられる[2]。

古墳時代

ここで取り扱った資料は、成川様式土器の範疇でとらえられるものであるが、いくらかの年代幅が考えられる。特に、甕形土器の口縁部の形態では、くの字状に外反する口縁部の内面に稜線をもつもの、ややくびれを残すもの、稜線をもたず緩やかに外反するもの、口縁部が内湾するものなどがある。このように口縁部から頸部の形態が多岐にわたっており、遺跡周辺でのかなりの時代にわたる生活が推察される。これはほかの器種についても言えることである。また、口縁部外側のかき上げ調整や、口唇部をヘラで押さえるようにナデで平坦に仕上げる調整など、各部分の調整にもいくつかの特徴が観察される。甕形土器の底部でも、脚部がやや薄手で端部をヘラでナデで平坦に仕上げているものや、脚部が厚手で端部を丸く仕上げているものなどもある。これらの特徴が時間差を表すものかどうか、層位的に捉えることができなかったのが残念であった。また、胎土には器種を問わず金雲母が多く含まれている。このことは大隅半島の弥生・古墳時代における土器の特徴のようである。

古代・中世

この時期の資料は少なくまた小破片のために詳細は不明であるが、土師器・須恵器・陶器・磁器などが出土した。白磁については13世紀前半のもので、青磁については竜泉窯のものと思われる蓮花文碗や稜花皿であり、15世紀頃のものであると思われる。

〈参考文献〉

①鹿児島大学考古学会「鹿大考古学会会報」5号　1987　より所収
①鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（7）「竹牟礼遺跡」　基幹市町村道（県代行）事業に伴う埋蔵文化財報告書　1993-3
②国東町教育委員会「安国寺遺跡」国東町文化財調査報告書第4集　1989
③根占町教育委員会「貴見原遺跡」鹿児島県根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 国営総合農地開発（肝属南部地区）に伴う確認調査報告書　1989
④鹿屋市教育委員会「高付遺跡」鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(2)　1984

図　　版

1．遺跡地遠景（南東側より）

2．遺跡地遠景（南東側より）

3．発掘調査風景（A－1～5区、東側より）

4．発掘調査風景（A－1～5区、東側より）

5．発掘調査風景（A－1～5区、西側より）

6．遺跡地冠水状況（A－1～5区）

7．土層断面（A－4･5区）

8．土層断面（A－7･8区）

1．溝状遺構検出状況（A−13区）

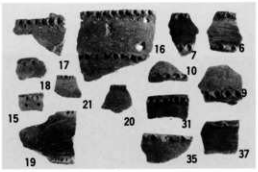
2．溝状遺構掘り下げ状況（A−13区）

3．溝状遺構完掘状況（A−13区）

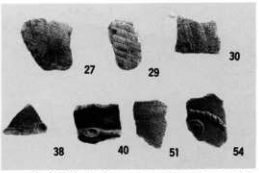
4．遺物出土状況（A−5区）

5．遺物出土状況（A−5区）

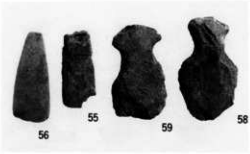
6．遺物出土状況（A−5区）



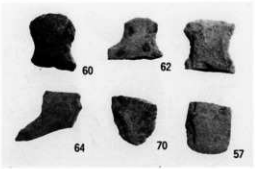
7．出土遺物（刻目突帯文土器）



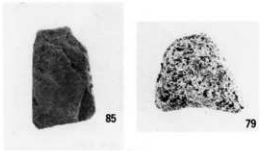
8．出土遺物（組織痕文土器・浅鉢形土器・その他）



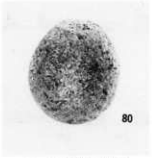
1．出土遺物（石斧）



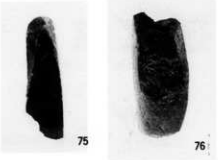
2．出土遺物（石斧）



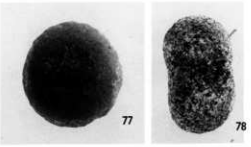
5．出土遺物（砥石・凹石）



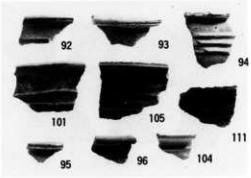
6．出土遺物（凹石）



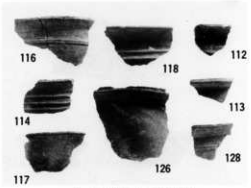
3．出土遺物（砥石・凹石）



4．出土遺物（敲石・凹石）

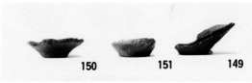


7．出土遺物（変形土器）

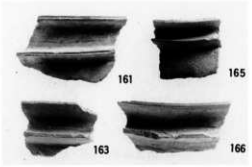


8．出土遺物（変形土器）

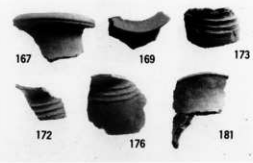
1．出土遺物（底部）



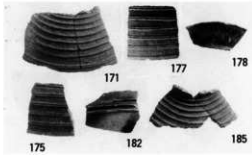
2．出土遺物（底部）



3．出土遺物（大型甕形土器）

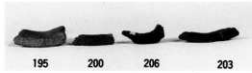


4．出土遺物（壺形土器）



5．出土遺物（壺形土器）

6．出土遺物（壺形土器）



7．出土遺物（壺形土器）

8．出土遺物（壺形土器）

1．出土遺物（壺形土器）

2．出土遺物（蓋形土器）

3．出土遺物（鉢形土器）

4．出土遺物（底部・231鉢）

5．出土遺物（高坏形土器）

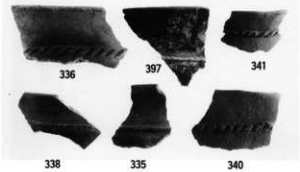
6．出土遺物（器台）

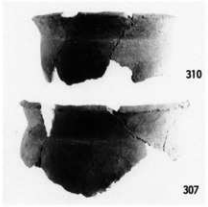
7．出土遺物（刀子）

300

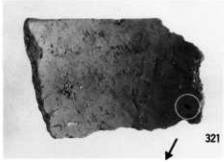
302

319


336 397 341 338 335 340


310 307

369


321

出土遺物　321．内面に付いたモミ痕（走査電子顕微鏡にて撮影）

417
416
420

410

411

412

413

424

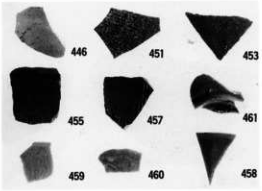
435
432
436

425

441
439
442

429

出土遺物


446
451
453
455
457
461
459
460
458

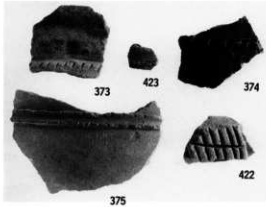
345
348
342

364
363

358
356

368

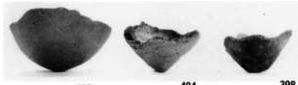
371


373
423
374
422
375

376

401
396

377


405
404
398

出土遺物

東田遺跡出土土器に付着した赤色顔料について（分析者　大久保浩二）

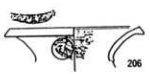
東田遺跡出土の土器2点に、赤色顔料の付着が認められるものがあった。その顔料について粒子の形状の観察と成分の分析を行い、顔料の種類の同定を試みた。その結果、2点とも酸化鉄を主成分とするベンガラで、粒子の形状はパイプ状であることがわかった。

分析に使用した機器は、鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵の日本電子製走査型電子顕微鏡（低真空タイプ・LV-SEM）とエネルギー分散型X線分析装置（EDS）である。X線分析は加速電圧20KV、有効時間100秒、取り出し角度20.32°、作動距離20.0mmの測定条件で行った。

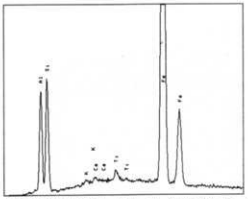
試料①

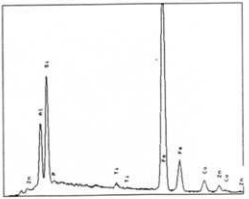
縄文時代晩期のものと思われる土器
口縁部（未図化・顔料は口縁部外面）

試料②

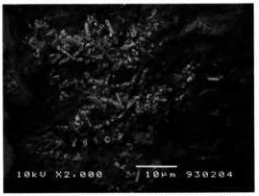


口唇部に櫛描波状文のある弥生時代の
壷形土器（顔料は頚部外面）





X線分析スペクトル図　Feの顕著なピークが検出された。



ＳＥＭ像　口径１μm、長さ10μm前後のパイプ状粒子が観察される。

あ と が き

肝属最大河川である肝属川は、太古より幾多の氾濫を繰り返しながら、周辺の人々の様子を日々刻んできたであろう。その河川周辺に位置している本遺跡の事も多く知っているのではなかろうか。

東田遺跡の発掘調査報告書もようやく刊行にこぎつけた。その間、確認・発掘調査においては、黄金に実った稲の刈り入れ準備や刈り入れと重なり、また台風、湧水でプールと化し、いろいろあったが、無事調査を終了することができた。

調査中は猛暑のなかで作業に携わった地元の方々や、県立埋蔵文化センターで整理作業に携わった方々に名を記して感謝の意を表します。

発掘調査作業

畠中ツユ、畠中武視、川原ムラ、倉園ハス子、松園弘教、北園マリ子、前原厚志、松園敬子、畠中ノブ、黒木ツミ、西迫セツ子、笠木キミ、西迫ヤス子、西迫フミ、新西チノ、西迫節子、下大園奈知子、石ヶ崎ヲノリ、西迫八重子、永吉節子、永吉秀視、永吉フジエ、永吉ヒフ、有村すみ子、川原時義、大園哲郎、福元三幸、上大園月子、石ヶ崎秀徳、石ヶ崎キミエ、飯ヶ谷安子

整 理 作 業

行船順子、東しず子、高倉晴実、前田まさ子

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（6）
県道高山－吾平線道路整備事業に伴う発掘調査報告書

東 田 遺 跡

発 行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-56　鹿児島県姶良郡姶良町平松6252
印 刷　トライ社
〒892　鹿児島市南林寺町12－6